

# 清末小説から 128

2018.1.1

いくたびかの阿英目録18.....樽本照雄 1

翻訳家としての林紓 「区別がつかない論」の現在.....神田一三 3

吴趸人《新石头记》于《南方报》连载情况以及“文明境界”首次出现时间小考.....梁 清散10

『比律賓志士独立伝』の底本 1 .....沢本郁馬13

李伯元死後のこと(上) 『繡像小説』発行遅延との関係.....樽本照雄19

漢訳リサール辞世詩3完 魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪.....荒井由美29

清末小説から9、13、18、29、43

本年もよろしくお願ひいたします。『清末民初小説目録 第9版』をウェブ上で公開して

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## いくたびかの阿英目録18

樽 本 照 雄

めぐりくる「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件

『繡像小説』の編者問題を汪家熔と学術討論したとき、私が根拠のひとつとしてあげたのが「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件だった。はじめは、劉鉄雲と李伯元の関係だと考えていた。『繡像小説』発行遅延説が出てくる前の話だ。

「老残遊記」の執筆発表過程は、比較的複雑だ。といってもそのおおよそは、周知のことになっている。創作作品をめぐる、著者と編集者、それも作家を兼ねている人々が相互に関係した。ある意味でなまなましい。関係者の記録によって、相当に深いところまで明らかにされている。当時の雑誌関係者の内部を知るよい事例となっているのだ。

職業作家ではない劉鉄雲(1857-1909)が、小説専門雑誌『繡像小説』に作品「老残遊記」をいきなり連載しはじめる。洪都百鍊生という筆名だ。当時の読者にとっては、見知らぬ作者のはずである。それをいうなら、筆名を使うのが普通で基本的な習慣だった。

連夢青は劉鉄雲よりも一足先に、憂患余生名で「鄰女語」を『繡像小説』第6期(癸卯六月十五日)から連載を始めた。主編である李伯元は、南亭亭長名で創刊号から「文明小史」「活地獄」などを書き続けている。歐陽鉅源も惜秋という筆名でこれも創刊号から「維新夢伝奇」を、蘆園名で第6期から「負曝閑談」などを連載した。

連夢青が劉鉄雲の原稿を『繡像小説』へ斡旋したという。編集長の李伯元は、その協力者である欧陽鉅源とふたりともに劉鉄雲の作品を認めて支持した。だから、連載している。没書事件が起こるまでのことだ。

だれでも最初は素人だ、とはよくいう。一般的に見れば、劉鉄雲はその素人作家のひとりだ。李伯元、欧陽鉅源たちとは異なる。作品といえば、「老残遊記」1作があるだけ。彼にとって、創作は余技のひとつにすぎない。専業作家にはならなかった。

創作に手を染めるまで、劉鉄雲はいくつかの実業その他に従事している。実行の人なのだ。淮安でタバコ屋を経営してみたり、流しの医療行為をしたり(薬学の著作あり)、民間信仰である太谷学派に心酔し参加している。数学に関する著作がある。科擧の試験を受けたが途中で放棄した。上海で石版印刷の石倉書局を設立したがすぐに廃業になった。

鄭州で黄河治水に参加した。関連して治水の専門書、黄河地図など5種類の書籍を執筆刊行する。鉄雲の父親の代から受け継がれた家の学問であった。

鉄道建設を建議する、外国資本を導入して山西鉞山を開発するように提案する。中国では過去において、外資導入の主張をしたことを理由に劉鉄雲を賣国奴として批判の対象にした。1970年代に改革開放政策がうたわれると、劉鉄雲はその先駆者として賞賛されることになる。日本語では俗に「手の裏をかえす」「手のひらを返す」という。政治の流れによって180度の評価逆転がおこるのは、現代中国では珍しいことではない。

劉鉄雲は、自らが手がけたそれらの事業にすべて失敗した。

1900年の義和団事件に際し、北京において難民救助活動に参加する。ロシア軍が占領する米倉の米を購入して市民の食糧問題を解決した。その頃甲骨文字にも興味を持ち始める。

1903年、収集していた甲骨文を掲載した『鉄雲蔵龜』を刊行する。「老残遊記」の執筆中と重なる。劉鉄雲といえば『鉄雲蔵龜』のほうが彼の小説よりも有名かもしれない。甲骨文字研究のさきがけである。骨董を収集するだけの財力があつた。彼の手になる関係書も『鉄雲蔵陶』『鉄雲蔵貨』『鉄雲蔵印』などが存在する(前出の劉徳隆整理『劉鶚集』を参照)。金石文への興味は連夢青、李伯元、欧陽鉅源らも共有していた。それに劉鉄雲が関係していたとみえる。実状はどうもそうだ。

のちに運塩会社設立に参加した。当時塩不足だった日本へ輸出することを主業務にする会社だ。その中国側役員に劉鉄雲が就任した。1906年、日本を2回訪問している。音楽、ことに琴に造詣が深く専門書を書いた。

北京で米を勝手に売った、輸出禁止の塩を密輸したなどの理由で冤罪をこうむる\*61。

新疆ウルムチに放逐され、その地で死去した。別の角度から見れば、彼の経歴は小説を地でいくように波瀾でいっぱいだ。

「老残遊記」は、黄河流域の山東省を舞台にして当時の中国社会を詳細に描写する。黄河といえば、劉鉄雲の豊富な経験の一部分を占めるにすぎない。わずかなそれを作品に反映させたのみ。音楽描写、太谷学派に関係する部分もあるにはある。だが、書かれてもよいより適切で小説の題材となりうる事柄が別にもっと豊富にあつた。そう容易に想像できる。劉鉄雲は、創作に盛り込むだけの十分な体験を有していたのだ。それをしていない。素人作家だという理由でもある。 罇

#### 【注】

61) 沢本香子名で発表。「劉鉄雲は冤罪である 逮捕の謎を解く」『清末小説』第24号2001.12.1、1-33頁。要旨：1908年に劉鉄雲が逮捕され新疆に流罪となったのは、事実である。しかし、その逮捕理由があいまいなまま現在にいたっている。研究者の誰ひ

とりとして逮捕理由を特定できなかった。汪叔子は、諸資料を整理したのち、清朝政府高官の間で交信された電報を根拠に、1898年山西鉞山開発、1900年北京太倉米販売、1907年遼寧塩密売の罪状を掲げた。そのうち前者2件については、無罪を宣言する。残る塩密売のみが有罪であると断定し、劉鉄雲と日本人の親交、外務部電報という「国家秘密」の漏洩を理由に、賣国奴だとも指摘する。しかし、汪叔子の立論は、それでは不十分である。日本が関係する事柄でありながら、日本の資料を見ていない。私は、日本側資料を利用し、劉鉄雲の塩販売活動は、日本政府に関係した公認されたものであり密売ではないこと、「国家秘密」漏洩の事実は存在しないことを指摘する。つまり、汪叔子は劉鉄雲に賣国奴という無実の罪をかぶせたことを証明した。

沢本香子名で発表。「劉鉄雲は冤罪である・補」『清末小説』第25号2002.12.1、118-128頁。要旨：劉鉄雲は塩の密輸に関係していたというのが、最近の中国歴史界の見解である。呉振清「劉鶚致禍原因考辨」(『南開学報』2001年第1期)によると、清国、韓国、日本の外交史料に劉鉄雲が日本人の鄭永昌と韓国運塩会社を設立したとある。そこに集められた史料を読むと、韓国運塩会社は、中国塩を韓国に輸入するため設立された正式な会社であることが理解できる。塩の輸出をするため、中国の関係機関に許可を求めて活動する様子が記録されているだけだ。そこには劉鉄雲が塩の密輸にかかわったいかなる証拠も、ない。研究者は、劉鉄雲が逮捕されたのには理由があるはずだという思い込みで史料を捜査している。ゆえに、不正とは関係のない史料を誤読したのだと理解できる。

次号の公開は2018年4月1日を予定しています  
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 翻訳家としての林紓 「区別がつかない論」の現在

神田 一三

翻訳家林紓を評価しようとするばあい、ひとつの問題が出現する。五四直前の1918年に発生した林紓批判そのものを分離あるいは無視できるだろうか。林紓批判を考慮しなくていいのか、と言っても同じだ。

先に言えば分離するのはむづかしいと考える。なぜなら、林紓の翻訳そのものが林紓を批判する根拠のひとつとなっているからだ。林紓批判と林紓批判は重なる部分が多い。研究者は林紓批判をどう把握しているかという問題にもなる。

復習すれば次のように言われ続けている。

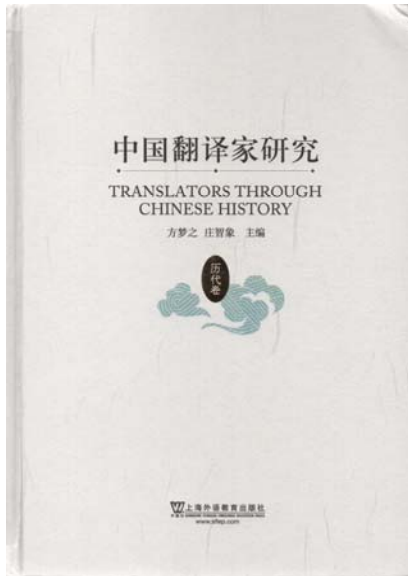
林紓は戯曲を小説にして翻訳した。戯曲と小説の区別がつかない。称して「区別がつかない論」という。主として林紓シェイクスピアと林紓イブセンを根拠にしている。ここが重要箇所だ。

さらには、翻訳家でありながら外国語を理解しなかったことも非難される理由のひとつに数えられる。そこで多数にのぼる共訳者の存在が意味を持つ。

以上が林紓を批判するときに使用される常套句の一部分である。「区別がつかない論」は、林紓以外に使用されることはない。ゆえに林紓批判の根幹をなしているといっている。

従来からある林紓批判について現在ほどのように説明しているか。2017年に公表された論文1篇を取りあげる。林佩璇「林紓」(2017)\*<sup>1</sup>で

ある。本稿では「区別がつかない論」に注目して該論文を検討する。



#### 林佩璇論文

林佩璇論文は『中国翻訳家研究(歴代巻)』という巨冊刊行物(本文だけで918頁)に収録されている。書名にあるように「翻訳家」を主題にした論文ばかりを集める。

林佩璇論文の構成は以下のとおり。

第1節 生平簡介、第2節 翻訳活動、第3節 著訳簡介、第4節 翻訳思想、第5節 翻訳影響、参考文献。

表題からおおよそ理解できるだろう。林紘の生涯を紹介しながら論点は翻訳に絞ってある。また、先行著作をあげて説明しているのも親切だ。

いくつかの部分を紹介する。

著者の基本的な論調は次の説明に見ることができる。

「林紘による外国小説の翻訳紹介は、中国の民衆に豊富な西洋文化を輸入し、当時の国民の文学文化視野を大きく切り開いた[林紘的外国小説紹介が中国民衆輸入豊富の西方文化、極大開拓了当時国人的文学文化視野]」801頁

特に珍しい見解ではない。五四以前の林紘については以上のように説明するのが普通だ。従

来は、「ただし」と続けて林紘の「否定面」を全面的に展開し非難していた。林佩璇論文にはそれがない。

林紘に対する肯定的な見方は、共訳者についての評価にも表われる。林紘が翻訳に際して役割分担をしたと説明するのだ(804-805頁)。外国語の堪能な協力者が口訳し、林紘がそれを筆述する。口訳者が20余名もいたことにより異なった外国の200種を上まわる多数の作品を刊行することができた。林佩璇は共訳者の存在を林紘の肯定的側面であると見定めた。

従来の文学革命派による見解では、共訳者たちがいることを否定的に説明していた。外国語ができなかった林紘だから作品の選択権が協力者の方にあったと非難したのだ。翻訳する必要のない2流3流の作品を刊行した原因というわけ。2流3流というのはハガード、ドイルなどの冒険小説、探偵小説を指している。文学革命派から見たばあい、大衆小説は批判の対象になった。林佩璇は、劉半農の意見を引用して林紘が価値のない作品を翻訳したと言及している(824頁。後述)。

林紘が作品につけた序、序文などに注目する。林佩璇はそれによって林紘の考えを理解することができるという。従来からある普通のやり方だ。しかし、『英国詩人吟辺燕語』が抜けている(807頁。後述)。

林佩璇の文章は、林紘の著作について広く紹介する。雑記、評論、遊記、教科書類、創作(小説、詩歌)などだ。

林紘が翻訳という仕事をとおして表現したかったのはなにか。林佩璇によると「愛国」である。

「翻訳とは愛国という実業だ[訳書即愛国実業]」804頁、「愛国之情」805頁、「林紘の愛国と社会改良の思想はその書物を翻訳するという熱い思いで一貫していた[林紘の愛国与社会改良思想貫穿其訳書情懷]」806頁

林佩璇は、林紘の翻訳をまとめて次のように

表現する。

「林紘の翻訳の成果は近代中国翻訳界において最高のものであるばかりか、中国翻訳史上において達成することのできる人はほぼいなかった [ 林紘の翻訳成就不僅在近代中国翻訳界首屈一指，在中国翻譯史中也很難有人能夠企及 ] 」  
824頁

最大級の賛辞だといっているだろう。林訳に対する負の評価は皆無である。

林紘翻訳の研究については次のようにまとめた。

20世紀前半は非難の声が称賛の声よりも多かった。しかし、ここ20、30年から翻訳類型の多元化が出現したことにより否定の声はますます少なくなった(825頁)。林佩璇による説明は、最近における林訳評価の変化を反映していると考えていい。

では、林紘批判に関して林佩璇はどう具体的に記述しているのか。

古文と白話文に関する論争に触れる。ただし林紘は「巻き込まれた」という認識だ\*2。従来から言われているような林紘から積極的に反論したものではないことになる。妥当な見解だと思う。

文学革命派を揶揄して林紘が書いた短篇小説はどうか。

「荊生」と「妖夢」の作品名を掲げるだけ(811頁)。内容を紹介しないし批判もしない。今までの林紘批判では、この2篇を必ずといっていいくらい取りあげた。小説の内容と当時の政治状況を強引に結びつけ、林紘は軍閥の力を借りて新文化運動を打倒しようとしたと非難攻撃した。無根拠にもかかわらず林紘の「悪辣さ」を証明する証拠とするのである。林佩璇論文にはそれがない。

シェイクスピア関連では陳家麟と共訳した「雷差徳<sup>マ</sup>[得]紀」「亨利第四紀」「亨利第六遺事」「凱徹遺事」の名前を挙げる(813頁)。それ以上は説明しない。以前ならば戯曲を小説に

かえて漢訳したと決まって批判する箇所だ。その批判はない。また、クイラー=クーチ本が底本だとも言わない。林紘の翻訳を論じる専門家がクイラー=クーチ本を知らないとは考えにくい。意図的に言及していないのだろう。

魏易の協力による漢訳本を紹介する箇所では、林訳批判の根拠になった著名な『吟辺燕語』を出さない(814頁)。だから漢訳ラムにも言及がない。ここも意思をもって説明していないと判断する。

毛文鍾との共訳本である漢訳イブセン『梅孽』(816頁)がドレイコット・M・デル本を底本とすることに触れない。ましてや戯曲と小説の区別がつかなかったとも述べない。

林訳について従来からある批判点はすべて指摘しない。それが林佩璇の基本姿勢であるとわかる。

#### 評価の現状

劉半農が林訳を批判したことは前述した。林訳批判について林佩璇が紹介するのは、劉半農が「復王敬軒書」の中で展開した次の2点だ。原稿の選択が妥当ではなく価値のない作品を翻訳した。もうひとつは、誤訳が多く原作の精神をまったく失ってしまい様相が一変した(824頁)。

林佩璇は鄭振鐸についても説明する。鄭振鐸は林訳がもたらした貢献を肯定しながら、林紘が原文を任意に削除したことを批判したという(825頁)。

林紘批判に関連して劉半農と鄭振鐸のふたりをあげるのは適切である。劉鄭は林紘批判を強力に推進した重要人物だからだ。

しかし奇妙なことがある。今までであるのが当然だった指摘がない。林佩璇は劉鄭のふたりが提起した、より重大で根本的な批判的言辞を慎重にしかも全面的に削除している。例の「区別がつかない論」である。戯曲を小説にかえて翻訳した。これこそが林訳批判開始の最初から前面に押し出されていた非難の理由なのだ。

林訳批判を推進した主な人物を確認しておく。次のとおり。

王敬軒(錢玄同)の投書に反論するかたちで劉半農が批判を開始した。胡適がそれを追認する。鄭振鐸が決定づけて阿英が強調した(後述)。

これが林紘批判の基本かつ主要な人脈である。錢劉胡鄭阿5人のつながりはどうしてもはずすことができない。

この背骨を形づくっている論点は、林紘が戯曲を小説体にして漢訳したことにある。戯曲と小説の区別がつかなかったと5人は主張した。のちの研究者はみなその視点を支持し継承して林紘を批判し続けて現在に至っている。

林佩璇は『吟辺燕語』を出さないから漢訳ラムに言及しない。そればかりか、漢訳クイラー=クーチ(シェイクスピア)、漢訳ドレイコット・M・デル(イブセン)についても口をつぐんでいる。

これらの沈黙はなにを意味しているのか。

林訳研究ならばあってしかるべき林紘批判への言及、説明がない。さらには、過去から現在に継続されている林紘批判をくつがえす重要証拠が実在することを言わない。林佩璇はこの問題=「区別がつかない論」に関連するすべてを無視したということだ。だいいち「区別がつかない論」を示す語彙を使用していない。触れないことが特別の意味を持つ。

「区別がつかない論」を理解するため時間経過にそって発生した事実をあらためて並べる。

1(1904年)莎士比著、林紘+魏易訳『英国詩人吟辺燕語』が刊行される。

2(1918年)王敬軒(錢玄同)が林訳を賛美する。劉半農が反論し林紘は「詩」と「戯」の区別がつかないと罵る。事前にふたりが打ち合わせたなれあいの手紙だ。

3(1918年)胡適は劉半農の使用した用語が不適切だと理解し「戯曲」と「記叙体(小説)」

にすぐさま訂正する。加えて、林紘はシェイクスピアにとっての大罪人だと罵る。

4(1924年)鄭振鐸が林訳シェイクスピアと林訳イブセンを根拠にして林紘は小説と戯曲の区別がつかなかったと断定する[林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的]。

5(1938年)阿英が林紘はラム本と莎劇の区別がつかなかったと批判する。

6(2007年)林訳シェイクスピアと林訳イブセンには小説化された底本が存在したことが明らかにされる。クイラー=クーチ本とドレイコット・M・デル本である。

7(同年)「区別がつかない論」の根拠が崩壊する。

8(同年)「区別がつかない論」を主張していた錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英らは誤っていたことが判明する。

9(同年)林紘は濡れ衣を着せられていた。冤罪だった。

10(同年)林紘冤罪事件の責任を追及すれば錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英という錚々たる人々が浮かび上がってくる。

5と6の間に区切り線を入れた。前後で時間的に長い空白がある。また林訳評価の内容が質的に一変するからだ。

7から10まで分けて書いたが、それらは6が発見された瞬間に生じる必然的結果である。

さかのぼって1の『吟辺燕語』刊行が1904年、2の林訳批判が1918年だ。14年間の空白はなんだろう。その間、誰も林訳に「問題がある」ことに気がつかなかったということか。

ここでいう「問題がある」というのは次のとおり。

『吟辺燕語』の底本はラム姉弟の『シェイクスピア物語』だが、林紘は莎士比(シェイクスピア)の名前だけを出した。ラムの名前はかかげていない。だからといってラムの存在を隠し

たなどという人は当時いなかった。そのころの翻訳界では底本を明記する習慣は定着していなかったのだ。知識のある人は『吟辺燕語』の底本がラム本であることを理解した。ラム本は当時の中国で英語学習用書籍として刊行されていた事実がある。簡単に入手できた。知っている人は『吟辺燕語』と容易に結びつけただろう。しかしくり返すが、ラム本であることを明記しないのはけしからん、と林紘を非難する人は皆無だった。

14年は短い時間ではない。清国が滅亡して中華民国が成立している。その間『吟辺燕語』は読者に歓迎された。商務印書館版「説部叢書」の元版、初集、また「小本小説」に収録されているくらいだ。『吟辺燕語』に対する悪い評判は立たなかった。だから奇妙な空白期間だと言う。そうして突然文学革命派からの林紘批判が始まった。批判の根拠に『吟辺燕語』が使用されたのだ。14年間なにもなかったのだから「突然」というのには意味がある。

林紘批判をはじめた劉半農もラム本があることは黙っていた。知らないふりをしたというしかない。彼は林紘が莎士比だけを掲げた点を逆手にとった。莎劇は戯曲だが、林紘はそれを漢訳して小説にかえた。「戯曲と小説の区別がつかない」論の原型を提出して林紘を批判したのだ。もしも劉半農がラム本の存在を林紘批判の根拠とすれば、彼の主張する「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麦]」はもともと成立しない。小説であるラム本を漢訳して小説になるのは当然だからだ。

劉半農による奇妙な林紘批判というべきだろう。林紘はラム本を底本にしたのが事実だが、劉半農はその事実をわざと無視した。莎劇が底本だと無理矢理こじつけた。莎劇そのものにしなれば劉半農の立論は成立しないからだ。その根拠は林紘がラムの名前をだしていないことのみ。「莎士比著」と表記した事実だけに寄りかかった。はっきり言えば劉半農は虚偽にもと

づいて林紘を批判した。劉半農の反論を引き出した王敬軒(銭玄同)もそれを承知している。胡適は、劉半農の使用した語句を修正しただけ。基本的に劉半農の説明を支持した。アメリカ留学帰りの胡適はラム本があることを知っていた。胡適は承知の上で林紘が「シェイクスピアにとっての大罪人」と断言したのだ。劉半農の虚偽に賛同したことになる。

不思議といえば、林紘を擁護する知識人がいなかった。ラム本を漢訳したのが『吟辺燕語』だから劉半農の批判は成立しない、と表立って主張する人が見あたらない。

劉半農による最初の林紘批判が1918年だった。鄭振鐸の林紘批判は1924年だ。鄭振鐸は、『吟辺燕語』を林紘批判の根拠にすることは不可能だと理解していた。林紘の底本はなにしろラム本なのだ。そこで彼はなんの説明もしないまま林紘批判の根拠となる作品を『吟辺燕語』ではなく別の林紘シェイクスピアと林紘イブセンに入れ替えた。これこそが鄭振鐸が自信をもって提出した林紘批判の確実な証拠である。まさかそれらが小説化本であるとは想像もしなかったのだろう。のちの研究者全員もその「まさか」に気づかなかった。

2007年に林紘批判の根拠が崩れた。クイラー＝クーチ本とドレイコット・M・デル本が存在すると指摘があった。林紘が戯曲を小説にして翻訳した事実はもともたなかった。小説を漢訳して小説になっただけ。どこにも林紘の落ち度はない。批判者に知識がなかっただけだ。

1918年を起点にすれば単純に計算して89年間だ。1924年からならば83年間になる。83年から89年にわたって間違った林紘批判が継続していた事実を研究者たちはどう考えているのだろうか。

一連の流れを普通に見れば、異常な状況であるとわかる。今まで研究者の全員が黒と信じていたことが、2007年になって一瞬で白に変化したのだ。これほどの激変はそうあるものではな

い。従来の文学史の記述を覆す。そればかりか、林紓を批判して「区別がつかない論」を持ち出せば、自動的に錢劉胡鄭阿5人の責任問題が発生する。5人に追従したのちの研究者たちも同様だ。林紓を狙って放った批判の矢がもどってきて自分自身を射る。

現在の中国学界は、上の6あたりまでは容認しているように見えないわけではない。だが、林佩璇論文を手がかりにして実状をたどると欠落した箇所があると判明する。「区別がつかない論」だ。どうやらこれとだけは関連づけさせたくないらしい。

林佩璇の論文は、表面的に見るとせいぜいが上の4あたりまでになる。ただし、「区別がつかない論」をまったく持ち出さないのは見てきたとおりだ。

林佩璇は、「戯曲と小説の区別がつかない」問題をまるで実在しないかのように目をつぶって通過した。

林紓らは翻訳する際に小説を底本にした。漢訳して結果として出てきたのが小説であるのは当然だ。林訳についていえば非難の原因となるはずの戯曲はもともと存在していない。鄭振鐸らは、存在しないことを根拠にして林紓を批判したことになる。だが研究者たちは圧倒的に鄭振鐸らを支持した。

林紓にしてみれば身に覚えがないことだ。無実の罪をきせられて批判された。これはいうまでもなく冤罪である。上に示した時系列でいえば9に該当する。

林佩璇論文を読むと中国学界がどこらあたりまで書くことを容認しているかがわかる。

林訳については今まで負の側面だとしていたのを正の側面に置き換えそれを前面に押し出す。肯定的姿勢に変更した。

残されたのは「戯曲と小説の区別がつかない」問題だけらしい。このいわゆる立入禁止区域にさえ進入しなければあとは比較的自由に書いてもよいとわかる。それはいくつかの論文を

読めば理解できる。クイラー＝クーチ本、ドレイコット・M・デル本があることを指摘するものが見えるからだ\*3。そこまでは許容範囲内らしい。

ただし、「区別がつかない論」に結びつけることは別である。

錢玄同、劉半農、胡適、鄭振鐸、阿英といった先達が深く関与している。ここに踏み込めば文学史の書き換えが必要となるはずだ。林紓が冤罪であったことを認定しなければならなくなる。五四時期前後における文学革命派の林紓批判が、客観的資料の存在により間違っていたとせざるをえない。さらには、責任者が指摘される事態が出現する可能性もある。そこまではやりたくない。現在のところは「区別がつかない論」と彼ら5人を結びつけさせなければいい。そういう中国学界の判断なのだろう。

林佩璇は「区別がつかない論」について触れることを自主規制したのか。それとも出版社の「上級」から指示があったのか。それはわからない。林佩璇論文には「区別がつかない論」を提出していないという事実だけがある。あまりに明らかだから書くのはためられるが、林訳を研究する人が「区別がつかない論」を知らないはずがない。従来から林訳批判の重要点である。だからこそ林佩璇は意図的に隠蔽したと考える。

陳大康『中国近代小説編年史』(2014)\*4の例を思い起こす。

『繡像小説』の発行が遅延していた。この問題については日本と中国において1980年代から討論する文章が発表されている。だが、中国学界は問題があることを認めなかった。

この問題の根底には阿英がいる。阿英は『繡像小説』の半月刊が守られたと考えていた。発行遅延などまったく発想しなかった。主編者李伯元の死去によって『繡像小説』は停刊した、と阿英は断言したのだ。それが文学史上の常識になった。



しかし実は阿英の断定には根拠も証拠もなかった。ないにもかかわらず研究者たちは疑問も持たず長年にわたって阿英の断定を支持し追従した。阿英は学界の権威である。阿英が間違っているとは誰も思わなかった。研究者たちは、半月刊が遵守され李伯元が死去すると停刊したと論文に虚偽を書き続けた。

問題が提起されてほぼ30年後、陳大康はまるで自分が発見したかのように『繡像小説』の発行が遅延していると説明した(序2頁)。阿英に誤解の原因があることには触れない。また、発行遅延を主張していた先行論文のすべてを完全に無視した。

そういう例がある。林紘批判の根拠にされている「戯曲と小説の区別がつかない」にしても、数十年後に突然それは正しくないと言い出す可能性もある。私は別にそれを期待しているわけではない。

言及がなされない部分に重要な問題が隠されている。五四直前の林紘批判から五四以後に展開された林紘批判は歴史に存在した事実である。その史実を客観的に把握したうえでどのように評価するのか。それは中国学界の内部問題にほかならない。私の研究とは直接の関係はないのだ。

四

【注】

- 1) 林佩璇「林紘」方夢之、莊智象主編『中国翻譯家研究(歴代巻)』上海外語教育出版社2017.4。799-830頁
- 2) 原文はつぎのとおり。「1917-1919年、林紘巻入近代中国文学界有關古文与白話文的爭論, 1917年發表《論古文之不当[宜]廢》一文, 1919年發表《論古文白話之相消長》回應蔡元培、劉半農等人, 表達自己对保留古文的想法」809頁
- 3) 参考までにいくつかの文献を示す。網羅しているわけではない。  
シェイクスピア関係

劉宏照「附録2 林紘訳作目録」『林紘小説翻譯研究』上海世紀出版股份公司、上海訳文出版社2011.10 学人論叢。359頁

張治『中西因縁: 近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8。184頁

張旭、車樹昇編著『林紘年譜長編(1852-1924)』福州・海峡出版發行集团、福建教育出版社2014.9。256頁

楊麗華『林紘翻譯研究 基於費爾克拉夫話語分析框架的視覚』北京・中国社会科学出版社2015.5。18頁。附録「林紘翻譯作品目録」153頁

デレ関係

劉宏照「附録2 林紘訳作目録」371頁

楊麗華『林紘翻譯研究 基於費爾克拉夫話語分析框架的視覚』18頁

4) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1

『新聞出版博物館』2017年第1期(総第30期)

2017.7

上海美華書館遷至北京路18号始末 ..... 蘇 精  
 《訳書略論》与初創時期的中国翻譯史研究 ..... 鄒振環  
 編者と訳者: 張元濟和伍光建 ..... 畢曉燕  
 關於商務印書館“發稿單”的來信 ..... 汪家燊

『福州大学学報(哲学社会科学版)』2017年第4期(総第140期)(2017.7.15)

林紘对日本小説《不如帰》的評價及其他.....張俊才  
 林紘《斐洲煙水愁城録》尚“力”文明話語的修辭建構  
 ..... 鄭曉嵐  
 林紘訳《伊索寓言》百年未解底本之謎新探 ..... 蘇建新

## 吴趼人《新石头记》于《南方报》连载情况 以及“文明境界”首次出现时间小考

梁 清 散

### 1. 连载情况的早期记录

吴趼人的《新石头记》于《南方报》1905年9月19日开始连载，并未刊登完结便终止连载，后于1908年由改良小说社直接出版单行本《绘图新石头记》，全本四十回，每回附有绘图。

关于《新石头记》最初在《南方报》连载到第几回终止，说法并不十分统一。

王俊年的《吴趼人年谱》中记录：小说《新石头记》自光绪三十一年八月二十一日（1905年9月19日）《南方报》第28号附张开始连载，至十二月（1906年1月）第148号，刊出十三回而辍。<sup>1</sup>

江苏省社会科学院明清小说研究中心文学研究所编的《中国通俗小说总目提要》中记录：光绪三十一年（1905）八月二十一日至十二月二十六日《南方报》载十三回。<sup>2</sup>

陈大康的《中国近代小说编年》中记录：（1905年）八月二十一日（9月19日）《南方报》开始连载《新石头记》，至本年十一月二十

九日止，标“社会小说”，此书共四十回，报上连载仅至第十一回。<sup>3</sup>

日本学者樽本照雄的《新编增补清末民初小说目录》中记录《新石头记》在《南方报》连载时间为光绪31.8.21-11.29（1905.9.19-12.25）总连载回数11回。我仏山人前言によると、13回（-12.26<1906.1.20>）までを確認しているらしい。<sup>4</sup>

分别为“连载十一回截止”和“连载十三回截止”两种说法。两种说法虽有两回的偏差，但对于《新石头记》的文本影响以及因为《新石头记》的创作所体现出的吴趼人的科学观改变研究方面，并无大碍。因为从1908年出版的单行本《绘图新石头记》全本四十回可以看出，小说的前十九回所述内容实际上并未涉及到王德威所说的“晚清最引人入胜的乌托邦小说”<sup>5</sup>范畴之内，主人公贾宝玉尚在“野蛮世界”（即20世纪初的中国）游历，此为现实世界，与吴趼人的《二十年目睹之怪现状》中的上海世界并无本质差别。直到第二十回的最后，贾宝玉忽然收到薛蟠寄来的信，信中提及要带贾宝玉去“自由村”，随后在第二十一回贾宝玉与薛蟠进入自由村，第二十二回开篇，焙茗被箭射中变为木偶，打开了新世界的大门，从此贾宝玉才终于进入后十九回一直叙述的科技、政治、道德都极度发达的“文明境界”。

《新石头记》分为上下两部分是显而易见的。而从文本的发表情况上看，1906年中断连载，让贾宝玉停留在“野蛮世界”，而至1908年全本出版才产生“文明境界”，吴趼人发生了思

<sup>3</sup> 陈大康.中国近代小说编年[M].华东师范大学出版社, 2002.12:143.

<sup>4</sup> (日)樽本照雄.新编增补清末民初小说目录[M].齐鲁书社,2003.3:804.

<sup>5</sup> (美)王德威,著,宋伟杰,译.被压抑的现代性——晚清小说新论[M].北京大学出版社,2005.5:310.

<sup>1</sup> 王俊年.吴趼人年谱//海风,主编.吴趼人全集·第十卷:吴趼人研究资料汇编[G].北方文艺出版社,1998.2:63.

<sup>2</sup> 江苏省社会科学院明清小说研究中心文学研究所,编.中国通俗小说总目提要[M].中国文联出版公司,1997.10:942.

想上和创作上的转变,便被认为是发生在1906至1908年之间的两年内了。<sup>6</sup>

## 2. 2010年以降的更正

2010年1月,东方出版中心出版《世博幻梦三部曲》,收录三部清末小说《新中国未来记》(梁启超)《新石头记》(吴趼人)《新中国》(陆士谔),每一部小说都附有黄霖所写的导言。

黄霖在《〈新石头记〉导言》一篇中,对《新石头记》在《南方报》上的连载情况的叙述与之前诸多目录书所述不同。导言述:《新石头记》最初发表在1905年9月19日《南方报》第二十八号附张“小说栏”上,以后陆续连载,署名“老少年”。《忤玉楼丛书提要》说此书‘初附刊于《南方报》,未完而报馆封闭’,但刊于1907年3月的《月月小说》第六号报癖(陶曾佑)的《新石头记》一文却说‘刊诸沪上《南方报》……全书凡四十回’,似乎已连载完全文。由于目前见于上海图书馆所藏的《南方报》已非

全帙,仅可见其连载至第二十回,所以无法核实孰是孰非。<sup>7</sup>

黄霖的“导言”表述《新石头记》在《南方报》上的连载情况,因为文献缺失而不能确定,但又确切地说到“可见其连载至第二十回”,与早期目录书所述的连载至第十一回或第十三回,有很大不同。并且如前所述,因为在小说的第二十回结尾处出现了“自由村”,可谓《新石头记》由“野蛮世界”向“文明境界”转变的开端,从而首发的连载情况到底为何,变得更加值得考据。

2014年,陈大康主编出版的六卷本《中国近代小说编年史》第二册中,又再述《新石头记》的连载情况:上海《南方报》开始连载《新石头记》,现所见至翌年(1906)二月二十八日,未完。标“社会小说”,署“撰者老少年(吴沃尧)”。此书共四十回,《南方报》连载至第二十一回,未完。<sup>8</sup>

从《中国近代小说编年史》的记述中可见,其一,《新石头记》的连载,再次由至第二十回终止扩展到了第二十一回。其二,书中另将每一回的回目全部列出。大大提高了连载情况描述的可信度。然而,在回目列表中,唯有新增的第二十一回后标注为“第二十一回:目次未见”<sup>9</sup>。

2016年,发布在清末小说研究会上的《清末民初小说目录X2》同样对这一条目进行修订。将陈大康《中国近代小说编年史》的修订,增补入目录之中,并增补张治等研究者的新研究成果。诸多成果皆将《新石头记》在《南方报》上连载章节推至第二十一回。

《新石头记》的第二十一回,从1908年出版的《绘图新石头记》全四十回本可知,贾宝玉

<sup>6</sup> 张强在《吴趼人“文明专制”思想探微》一文中专门阐释了如此观点,认为之所以《新石头记》的后半部分会出现“文明境界”,是受到了1906年9月1日的“预备立宪”的影响和冲击,使得吴趼人在续写未完成的《新石头记》时,彻底转变了创作方向。(张强,吴趼人“文明专制”思想探微[J],郑州大学学报,1996(4).)拙作《〈近现代科幻小说书目〉晚清部分(1891-1911)重点作品说明及创作脉络新探》中亦有类似观点:考其文本可知,第十一回仅写到“看造枪炮转疑教授 退打璜表论及赌徒”,贾宝玉并没有进入文明境界,薛蟠也没有接到自由村的信,小说内容与当时其它反映社会现实的小说基本没有差别。正由于它全本面世的时间较之《新纪元》晚了半年有余,因此,它的意义并非是开创性的,而是锦上添花。(梁华,附录二:《近现代科幻小说书目》晚清部分(1891-1911)重点作品说明及创作脉络新探//吴岩,著,科幻文学论纲[M],重庆出版社,2011.4:231.)

<sup>7</sup> 黄霖.《新石头记》导言//黄霖,校注.世博幻梦三部曲[G].东方出版中心,2010.1:83.

<sup>8</sup> 陈大康.中国近代小说编年史(二)[M].人民文学出版社,2014.5:888.

<sup>9</sup> 陈大康.中国近代小说编年史(二)[M].人民文学出版社,2014.5:888.

与薛蟠已抵达自由村，但结尾为焙茗中箭，尚无“文明境界”的任何描述。因此，即便《新石头记》的连载情况又往后扩展了一回，却仍不能证明那个最为引人入胜的乌托邦世界“文明境界”就在1906年连载时已构思成型。假若《新石头记》就此停止连载于第二十一回，且二月二十八日距离《南方报》封馆尚有三个多月之久，并非因为封馆而硬性斩断连载，就更能证明吴趼人写至于此无法继续，后因种种原因（政治社会的变动，《新纪元》的出版发行等）受到启发才有了“文明境界”的崭新世界。

由于问题变得更加复杂，且黄霖、陈大康皆无更多说明，唯有直接翻找《南方报》原始文献，探之始末，寻找线索。

### 3.《新石头记》于《南方报》连载情况详述

笔者根据翻阅国家图书馆所藏《南方报》的缩微胶片文献资料所得的直观确认和新发现，做出对《新石头记》于《南方报》连载情况的如下描述以及说明：

首先，《南方报》连载《新石头记》到第十一回（或第十三回）的说法是不对的。在第十一回之后，《新石头记》仍旧连载；

其次，黄霖所说的连载到第二十回，亦是不准确的。

《新石头记》第二十回开始于《南方报》二月十七日（3月11日）总第194号，紧连第十九回之后出现。《南方报》二月十八日（3月12日）继续连载《新石头记》第二十回，二十回未完，且薛蟠寄来的提到“自由村”的信件尚未出现。二月十九日（3月13日）起，《南方报》再无小说栏目，《新石头记》亦不出现。

其三，虽然报纸不再出现小说栏目，也不再出现《新石头记》，但陈大康所说的连载到第二十一回仍旧属实。

因为从公历1906年3月13日开始，《南方报》的小说栏目移出正刊，放入了需要向销售人员索取才能获得的“附张”上面。3月13日的报纸头版有广告说明此事，“今日增刊小附张载有

新添小说不加分文如有遗漏请向售报人追取”。然而，由于附张收录缺失，仅有二月二十二日（3月16日）和二月二十八日（3月22日）两天的报纸收录了一页附张，并且看到有《新石头记》内容。因为中间文本缺失，只能看到3月22日的附张中已经连载到了第二十一回的中间。也就是贾宝玉与薛蟠抵达“自由村”，但尚未涉及“文明境界”。

其四，从二月十九日（3月13日）起，报纸头版关于“附张”的广告不定期出现。基本是两种内容：1.今日增刊小附张载有新添小说不加分文如有遗漏请向售报人追取；2.本报近觅得社会小说（新儿女英雄传）札记小说（闻尘偶记）侦探小说（反侦探）三种与现登新石头记小说从二月十九日起特添附张轮日排登阅者注意注意。前者未出现《新石头记》字样，判断不了是否该日亦有《新石头记》连载。然而，从三月十五日（4月8日，总223期）至三月二十一日（4月14日，总228期），于头版中缝连续出现“附张”广告，内容亦为“本报近觅得社会小说（新儿女英雄传）札记小说（闻尘偶记）侦探小说（反侦探）三种与现登新石头记小说从二月十九日起特添附张轮日排登阅者注意注意”。三月二十二日（4月15日）起，“附张”广告偶见，将“今日增刊附送小说一张不加分文如有遗漏请向售报人追取”，与之前的“附张”广告略有不同，将“小附张载有新添小说”更为“附送小说一张”，却再不见《新石头记》任何字样，无从判断是否依旧连载。

综上所述，《新石头记》在《南方报》的连载情况，不仅只至第二十一回。而可以直观见到的最后文本即是二月二十八日（3月22日）“附张”中的第二十一回中间部分的片段文字。根据“附张”广告所提供的间接信息，在文献缺失的情况下，基本证明《新石头记》一直连载到了三月二十一日（4月14日）。然而，三月二十一日（4月14日）到底连载到了什么地方，却不得而知了。不过，根据二月二十八日（3月22日）“附张”中所呈现内容，《绘图新石头记》

第二十一回の篇幅, 以及《新石头记》在《南方报》每期连载篇幅判断, 直至1906年4月14日止, “文明境界”基本可以肯定已经出现。

因此, 那个最为引人入胜的乌托邦世界, 首次出现基本确定是提前了两年, 即1906年初, 而非1908年。 ㊦

『比律賓志士独立伝』の底本 1

沢本郁馬

『清末小説から』第124号 2017.1.1

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 4完

「区別がつかない論」再び .....樽本照雄

いくたびかの阿英目録15 .....樽本照雄

新しい「説部叢書」研究 .....神田一三

林訳『伊索寓言』の底本(下) 挿絵の謎を解く .....沢本郁馬

『清末小説から』第125号 2017.4.1

いくたびかの阿英目録16 .....樽本照雄

『瑞西独立警史』について1

漢訳「スイス独立史」 .....沢本香子

晩清民国時期《金銀島》漢訳本考述 .....付 建舟

商務版「説部叢書」試行本 .....神田一三

瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘 .....樽本照雄

『清末小説から』第126号 2017.7.1

いくたびかの阿英目録17 .....樽本照雄

漢訳リサール辞世詩1

魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪.....荒井由美

「説部叢書」元版はタンポゴ文様 .....神田一三

『瑞西独立警史』について2

漢訳「スイス独立史」 .....沢本香子

『清末小説から』第127号 2017.10.1

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序・補遺 .....樽本照雄

漢訳リサール辞世詩2

魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪.....荒井由美

『瑞西独立警史』について3完

漢訳「スイス独立史」 .....沢本香子

文明戯「ハムレット」について

「鬼詔」と「竊国賊」 .....樽本照雄

翻訳作品『比律賓志士独立伝』は、阿英「晩清小説目」には未収録だ。彼が編集した別の目録に掲載されている。阿英「辛亥革命書徴」\*1である。この「辛亥革命書徴」は同じ題名で時間を経て3カ所に存在する。

1 問題の発生

その3カ所にある記述を下に並べる。同じように見えるかもしれない。だが、書名に奇妙なところがあることに気づくはずだ。

[阿学203] 比律賓志士独立伝 日本崇昭本西著 吳超訳 一九〇二刊 訳書彙編社版一冊

[阿辛180] 比律賓志士独立伝 日本崇昭本西著, 吳超訳。一九〇二年刊, 訳書彙編社版。一冊。

[述略154] 菲律賓志士独立伝 日本崇昭本西著, 吳超訳。一九〇二年刊, 訳書彙編社版。一冊。

傍線があるなしの違いが問題ではない。3本の書目は基本的に同じものだ。ところが同一作品であるにもかかわらず書名の1字が異なって

いる。2本は「比」で1本は「非」と表記が違う。編集途中でだれかが手を入れたらしい。

フィリピン(昔はヒリッピン、フィリッピンなどと表記した)は、現代漢語では「菲律賓」と表記する。もうひとつの「比律賓 bilübin」では北京語で発音してもフィリピンにはならない。だから、漢訳者の呉超が、なぜ「比律賓」を採用したのか理由は不明。日本語では「菲律賓」もあるが「比律賓」を使う。日本語音であれば両者は同一だ。

上記作品の「非」および「比」という異なる表記を前にすれば誰でも不審に思う。当時の書籍は、表示場所によって題名が違うことが普通にある。目録を見るだけではどちらが正しいのかわからない。

もうひとつ、著者の国籍を「日本」としているところにも疑問がある。日本語の比律賓を使い、著者が日本人ならばつじつまがあう気がする。記述の違いは別にしてだ。

日本人の原作ならば、著者の名前に「崇昭本西」はありえない。順序を逆にした「西本昭崇」ならばあるかもしれない。そう書いたこともある。だが、奇妙なことに「西本昭崇」で調べても何も出てはこないのだった(後述)。

書名に不一致がある。日本人でありながら「崇昭本西」と存在しそうな名前になっている。

以上の問題は、作品の実物を見ずには解決できない。目録の記述だけに頼ることの危険性を示す例のひとつだ。

目録の記述に関連して少し横道へ。

## 2 樽目録がほかと違うところ

あの目録はそう書いている、この目録にはこうある。それらをいくらながめても解答に到達することは少ない。上がいい例だ。

研究は、実物を手元において進めるものだ。その原則を知る人にとっては、以下に述べるこ

とは理解しがたいかもしれない。だが、日本において清末の創作、翻訳を研究対象にするその原則は簡単に崩壊する。

作品の実物を見るができなかった時代は、目録の記述を頼りに問題を考えていた。中村忠行は、実物にもとづいて立論する研究姿勢をくずさなかった。しかし、不足する部分は阿英目録の記述を使用せざるをえない。そうして清末翻訳小説について多数の論文を発表した。推測して正しいばあいもあるがその逆もあった。実物を見る機会が失われていた当時(1980年代まで)のことだ。しかたがない。研究の原則が崩壊しているというのは、そういうことだ。

しかし現在は、目録の記述のみを根拠にして論文を書く時代ではなくなりつつある。これが大きな変化だ。

もとはといえば、阿英だけが特別だった。自分が所蔵する清末小説の実物によって目録を編集したのだ。当時すでにあった目録は、阿英が参照したとしてもほとんど役には立たなかっただろう。商務印書館の『涵芬楼新書分類目録』は文学類に400種近くの翻訳小説と約120種の創作作品を収録していると阿英自身が紹介している(『晚清小説史』1頁)。それでも阿英の所蔵する1千種以上に比べれば見劣りがする。

というように清末小説に特化した比較的規模の大きい目録は阿英の時代には存在しなかった。くり返すが彼は実物を見て目録を作成している。ゆえにその記述を引用して「阿英目録によると」と書くことができる。それでも記述の不一致が生じている部分があるのは事実だ。

問題が発生するのは、阿英目録以後に編集刊行された書籍類においてである。中国で公開された小説目録、年表は、参照した典拠資料を明示しないことが普通になった。参考文献をまとめて掲げるものもあるが、そのことを指しているのではない。個々の作品について典拠を示していないという意味だ。少数の例外を除いて誰もその発想をもとから持たなかった。

阿英は実物を手元においてそのまま記述した。ほかの目録は参照しなかっただろうからその記載もない。だが、後の研究者は、阿英が実物に基づいていたという事実を無視した。参考文献を記載しない表面だけを見て阿英目録をまねた。あるいは、中国でも実物が入手できない状況があったか。その結果、先行する目録を引き写しただけですませるものも出てくる。典拠を書かないからどの部分が自分で確認したものか、どこが引用なのか区別することが不可能だ。

例をひとつあげる。劉永文『晚清小説目録』(2008)がある。単行本部分は先輩学者の目録を多く参考し引用したと書く(説明2頁)。だが、具体的な文献名はあげない。ただ、配列についてのみ『新編増補清末民初小説目録』(=樽目三2002)を参考にしたという(同前)。それ以外の文献名は見られない。ゆえに参考引用したという先輩学者の目録についていちいち注記するはずもない。結果として細部についての信憑性がゆらぐ。劉永文が自分で単行本を確認したのか、それとも先行目録を写しただけなのか区別ができない。そこが弱点だ。最終責任者は必然的に名前を冠している劉永文になる。彼の名前のみが掲げられているから必然なのだ。引用するならば「劉永文目録によれば」と書かざるをえない。配列について参考にした樽目三に責任を転嫁することはできない。

劉永文目録に弱点があることを理解したのが鄭方曉(2013)\*<sup>2</sup>である。鄭方曉は賢く、劉永文目録の弱点をわざと指摘しない。それどころか逆に劉永文目録がすべての点において樽目三よりも優れていると鄭方曉は高く評価した(12頁)。そのように書かなければ指導教授、論文審査員たちの同意が得られないとよく認識していたと思われる。鄭方曉の本音は「付録《説部叢書》系列目録」(163-179頁)を見ればわかる。鄭方曉は「説部叢書」目録を作成するにあたって樽目三の方に依拠したのだった。すべての点において優れているはずの劉永文目録には一顧だに

していない。一見不可解に思える鄭方曉の選択だ。しかし、商務印書館「説部叢書」について研究するには樽目録に頼らざるをえなかったのが事実だろう。

ただ奇妙に思うことがある。翻訳研究の博士論文でありながら上の「説部叢書」目録には原作をまったく明記していない点だ。樽目録に書かれている原作を引用することすらしていない。指導教授は鄭方曉を指導しなかったのだろうか。論文審査によく合格したものと不審に思う。中国学界に従来からある翻訳軽視の傾向が露呈したということだろう。また、はるか昔の樽目三ではなく清末小説研究会ウェブサイトで公開している最新版を利用すべきだった。蛇足ながらつけ加えた。

樽目録は従来からある目録とは編集方針が基本的に異なる。樽目二(第2版1997)より典拠資料を明記する。樽目三は、2002年に中国で刊行した。第8版に当たる樽目X2八(2016)では748種の参考文献を列挙した。作品のひとつひとつにそれらの文献を注記するようにつとめたのだ。それぞれの典拠そのものが記述責任を持つ。ゆえに「樽目録によれば」という書き方は基本的にできないようになっていく。アメリカに住む馬泰来は、早い時期からその点をよく理解していた\*<sup>3</sup>。彼は数少ない理解者のひとりだといっている。

典拠を明らかにすることが小説の実物に近づく手がかりになるだろう。これが私の判断である。

なぜ「手がかり」というのか。くりかえすが、実物にたどりつくための手がかりだ。目録の最終目的を作品そのものに到達するところに置いている。2次資料にもとづいた記述に間違いがあるのはしかたがない。実物で確認すれば解決するだろう。

そう考えるにいたったのには、目録編集をした過去の経緯があるからだ。

小説目録を作成する手順を考えれば、くりか

えすが阿英のように実物を手元において編集するのが原則だろう。だが、日本という外国の地では、清末小説を扱う際の原則手順を実践することができなかった。本来ならば中国の研究者の仕事だ。そう何度も私は説明してきた。そう言いながらあえて樽目X2八を公表しているのは理由があるのだ。

清末小説関係の資料は日本にはほとんど所蔵されていない。それが、中国の「文化大革命」開始(1966)以前からの一般常識だった。今から半世紀以前のことでないか。当時は実物で確認できる状況ではなかったと重ねていう。数種類の小説雑誌が日本国内に分散していただけといっても過言ではない。それらにもとづいて小説総目を作成したことがある。小説単行本の実物がまとめて保存されている場所などない。日本で刊行された中国最初の小説専門雑誌『新小説』全24冊ですら日本には全冊揃いを実物で所蔵する機関はなかったし現在もない。1980年代に不完全な影印本(広告ページを削除する)が出版されるまでは、そういう状態だったのだ。

日本で清末民初小説目録を編集するにあたって、実物を確認することは最初からあきらめるほかない。1980年代当時、できることといえば清末部分に関しては阿英目録を基本にすえる。それに自分で作成していたいくつかの清末雑誌総目録から作品を補充することだった。阿英目録は小説雑誌に掲載された作品を収録対象にしているところが新しい。彼以前は、単行本を主体にするのが常識だった。雑誌それ自体が清末に出現した新しい形態だったのだ。阿英目録の十分ではないところを私の雑誌総目録でいくらかは補うことができる。さらに民初小説目録は最初から存在しなかった。清末と民初を分断することなくひとつがりのものとして把握するという認識がなかったからだ。それをつないで一体化する。そのためには多くの2次資料から必要項目を採取するほかない。だからこそ目録には典拠を明記する必要があるという私の考えが

生まれた。典拠をたどっていけば、それが蔵書目録であれば実物にたどりつく可能性も出てくる。阿英目録しかなかった時代は、研究といっても手探り状態だったのだ。

しかし「文化大革命」以後、1980年代、90年代より研究環境が変わりはじめた。特に作品の実物、本文をめぐるの中国における環境変化が著しい。

中国の図書館で小説の実物を閲覧できるばあいもある。ものによれば複写することも可能だ。世紀を跨いだ現在では、影印本であれば購入できる。あるいはネットで全文が画像で提供されていることもある。ただし不安定だ。昨日まで全文を読むことができたにもかかわらず今日は読めない。そういう変更が普通にあるということだ。ネット古書店から実物を購入する可能性まで出てきている。中国に行くこともできなかった時代を知る私は感慨を深くする。ネット古書店では、すでに売却されてしまった書物でも書影が保存されていることがままある。表紙、本文の一部分、奥付を写真で確認できれば大いに役立つ。また、ネットを利用して図書館の蔵書検索ができるのも便利だ。

現在の樽目録は、それらを総合して成立している。新しい資料が出てくるたびに注釈を追加する。1988年の初版から2016年のX2までの28年間に作り直して前述のとおり第8版になった。実物で確認した書物も、2次資料の不確かな書籍情報も同一に扱う。過去の目録が間違っている箇所もそのまま残す。正しいもので書き換えてしまえば誤っていた事実が消えてしまうからだ。樽目録は、過去の研究成果を保存することを意図している。

だが中国人研究者は、樽目録について中国で編集刊行された小説目録と同じだと考えるらしい。典拠資料を明記していることに気がつかない。いくつかの論文に樽目三という旧版を引用しているのを見かけた。中国では個人のネット接続を制限しているという。樽目録最新版は関

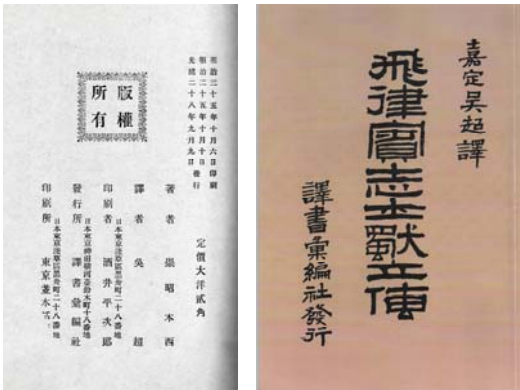


覧できないと中国人研究者から聞いた。だから当然のように紙媒体の古い樽目録を使用し、それについて不足部分を指摘しているのだ。古すぎる。「樽目録にはこう記述している」といつものとおり疑問もいだかずに書く。間違い。そのような指摘はもともと無効である。ここは樽目録の注釈部分に明示している典拠資料そのものを掲げなければならない。

ひとことでいえば、利用方法を間違えている。樽目録の基本を了解することができない利用者が多いといわざるをえない。残念なことだと思う。事例をみつけるたびに実名を掲げて利用方法が違うと私が指摘する理由だ。

閑話休題。

本稿で問題にしている該書の影印本を入手した。



### 3 『比律賓志士独立伝』とその底本

表紙は「飛律賓志士独立伝」だ。目次、本文が「比律賓志士独立伝」(本文の表記を使用する。以下、『志士独立伝』と称す)。清末に発表された作品の中には、作品名の表記が表紙、扉、目次、本文、奥付で一致しないばあいがある。不思議なことではない。『志士独立伝』もその類だ。

本文は「比律賓 崇昭本西著 / 嘉定 吳超訳」である。奥付の発行所は「日本東京神田駿河台鈴木町十八番地 / 訳書彙編社」、刊年は「明治三十五年十月十日 / 光緒二十八年九月九日発行」となっている。明治と光緒を併記すると

ころから、いかにも中国人留学生が日本で刊行した書籍だとわかる。序が3頁、目次が2頁、本文わずかに36頁のいわば小冊子だ。

やはり実物(ここは影印本)を見なければわからない。

著者崇昭本西の国籍は「比律賓」だった。ゆえに「日本」とするのは阿英による誤記であることが判明する。実物に基づいて記述しているはずの阿英でさえ誤ることがある。日本と記述する目録は、典拠を示さなくても阿英の目録から引用して誤ったことがわかる。

例をあげるならば、張曉編著『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』\*4だ。

[漢訳3437]「<sup>マ</sup>非律賓志士独立伝」(日)崇昭本西著

書名を間違い、ポンセの国籍を「日本」のままにしている。実物で確認しなかった、あるいはできなかった。

中国人の吳超がフィリピンを漢訳して日本語の「比律賓」を使用するのはいささか腑に落ちない。表紙の「飛律賓」ならばまだ原音に近いのだが。

フィリピン人の著作を漢訳したことは事実だ。ではその底本にはなにを使用したのか。表紙、本文、奥付にも説明、記述はない。

ところが、該書冒頭を飾る漢文で書かれた「序」の文末に「宮本平撰」とある。これが決め手になった。

原本は(比律賓)マリアーノ・ポンセ MARIANO PONCE 著、宮本平九郎、藤田季莊共訳『南洋之風雲』(博文館1901.2.23)である。扉と本文には「比律賓独立問題之真相」と副題がつく。

扉は「比律賓 マリアノポンセ著」となっている。現在、多くはこちらのマリアノを使用する。

該書扉には、スペイン語で原書の表示がある。QUESTION FILIPINA. UNA EXPOSITION



HISTORICO-CRITICA DE HECHOS RELATIVOS A LA GUERRA DE LA INDEPENDENCIA. 直訳すると「フィリピンについて」、あるいは「フィリピン問題」となる。扉に示された副題スペイン語には誤植があるかもしれない。意識して「独立戦争に関する事実の重要な歴史的真相」としておく。日本語訳「比律賓独立問題之真相」とほぼ同じだ。

原文はスペイン語で書かれたと考えるほかない。収録してある「比律賓独立軍々歌」、リサール「臨終の辞」などはスペイン語も示している。訳者の宮本平九郎、藤田季荘はともに外務省翻訳官だった\*5。 ㊦

【注】

- 1) 張於英(阿英)『学林』第6輯1941.4掲載。略号は[阿学]。数字は頁数。以下同じ/張静廬輯注『中国近代出版史料初編』上海上雑出版社1953.10所収。略号は[阿辛]/阿英『晚清文藝報刊述略』上海古

典文学出版社1958.3所収。略号は[述略]。樽本注:同じ目録のはずだが[述略]にはいくつかの作品が未収録。

- 2) 鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦大学2013 博士論文  
 3) 馬泰来「無中生有的最早林訳《葛利佛利葛》」『清末小説から』第86号 2007.7.1  
 4) 張曉編著『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』北京大学出版社2012.9  
 5) 国立国会図書館デジタルコレクションの『官報』につぎのような記録がある。

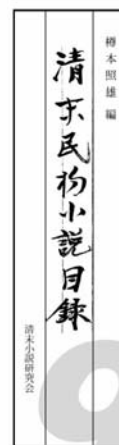
賜三級俸 外務省翻訳官 宮本平九郎 『官報』第4984号 1900.2.15

叙従六位 正七位 宮本平九郎 『官報』第4986号 1900.2.17

依願免本官 外務省翻訳官 宮本平九郎 同上  
 宮内省御用掛被仰付 休職外務省翻訳官補 藤田季荘 『官報』第5060号 1900.5.18

宮内大臣官房勤務ヲ命ズ 宮内省御用掛 藤田季荘 同上

任式部官 休職外務省翻訳官補 藤田季荘 『官報』第5583号 1902.2.17



樽本照雄編『清末民初小説目録 第9版』[樽目九] 日本・清末小説研究会2017.10.1電字版(ウェブ公開非売品)

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 李伯元死後のこと(上) 『繡像小説』発行遅延との関係

樽本照雄

李伯元(宝嘉)が主編する小説専門雑誌『繡像小説』(商務印書館発行)は、月2回の刊行を予定していた。しかし、実際には早い段階から定期を維持できなくなる。発行は徐々に遅延していった。第13期より発行年月日の表示が消失した理由だろう。終刊の第72期は、考えられていた光緒三十二(1906)年三月十五日から大幅に遅れた。同年十二月末の発行である。三月から数えれば刊行は約十ヵ月(閏四月を含む)も遅延した。新聞雑誌に掲載された出版広告に基づいて私がそう指摘したのは1985年のことだ(後述。本稿において雑誌発行年月は基本的に旧暦を使用する)。

30年以上が経過している。その間、各種新聞の発行広告を調査した。発表された関連論文を読み資料を集め記録の精度を高めると上記の結論はより強固なものになる。

『繡像小説』の刊行について1985年以前に流布していた間違った説明を復習することからはじめる。

### 阿英の断定

最初に登場するのは阿英だ。小説雑誌群は清朝末期に突然出現した。空前の現象だといえる。阿英はそれに早くから注目する先駆者のひとりだった。学界の権威とされる理由のひとつであ

る。

阿英の説明を引用する。簡単な記述だ。翻訳する必要はないと思う(傍線省略)。

[阿英]「繡像小説」刊于癸卯(一九〇三)、丙午(一九〇六)停刊、李伯元主編、半月刊、商務発行。線装本、逐回繡像、多名著。(「清末文藝雑誌」『太白』第2巻第10期 1935/のち「清末小説雑誌略」『小説閑談』1936所収、54頁)

『繡像小説』は商務印書館が刊行する活版印刷の線装本だ。中国最初の小説専門雑誌が日本横浜で出版された活版印刷の『新小説』だった。全24冊を刊行して停刊する。ページ数の関係で単純比較するのはむづかしいが、冊数だけを見れば『繡像小説』は全72冊を出している。当時の小説専門雑誌として号数は最多だ。

阿英は、この時点で終刊(停刊)が丙午(1906年)だといっているにすぎない。ただし、なぜ丙午であるかの根拠を示さない。雑誌を見たことがない人ならば、阿英が断言しているから雑誌に丙午という記載があると思うだろう。だが第72号には前述のとおり刊年は印刷されていない。

もうひとりの研究者畢樹棠は時間に幅をもたせた。「停刊の年月は不明。たぶん光緒三十二年から三十三年の間だろう[停刊年月不明、約在光緒三十二三年之間]」(「繡像小説」『文学』第5巻第2号 1935/魏紹昌は停刊時間についてのこの重要部分を改竄して『李伯元研究資料』1980に収録、462頁)。

『繡像小説』第72期の発行年月については、畢樹棠の説明のほうが阿英よりも適切だといえる。終刊が丙午(1906年)だと確認できる資料が当時は見つからなかったからだ。

のちに阿英は丙午から時間をさらに絞り込む。李伯元の死去と関連づけたのはそれからほぼ20年後である。

阿英が一步踏み込んだというのはこうだ。李伯元の死去によって『繡像小説』は停刊した。

[阿英] 因伯元逝世休刊, 共行七十二期。(「晚清文学期刊述略」『文藝報』1957年第28号 / のち『晚清文藝報刊述略』1958所収、17頁)

これが阿英による断定だ。李伯元死去と『繡像小説』停刊を結びつけて最初に断言したのは阿英ということになる。ただし、両者がなぜつながるのか阿英は理由を説明しなかった。

その思考過程を私なりに推測すると次のようになる。

李伯元は光緒三十二年三月十四日に死去した(事実)。「繡像小説」が半月刊を守っていたならば第72期の刊行はまさに光緒三十二年三月十五日となる(仮説)。李伯元死去と一日しか違わない。この時間的一致はとても偶然には見えない。だからこそ阿英は「李伯元の死去により休刊した」(仮説)と断定したのだろう。

研究者は誰も阿英の説明(仮説)に対して異論を唱えなかった。学界の権威である阿英の説明を疑う理由がない。出版を証明する証拠資料があるとも思わなかったからだ。引用に引用を重ね、阿英説は学界の定説となった。

重要なのは、李伯元の死亡と『繡像小説』の停刊を結びつける根拠を阿英は持っていなかった点である。証拠がないにもかかわらず断言した。

1985年に私は資料を提出して雑誌停刊は阿英のいう光緒三十二年三月ではなく同年年末だと指摘した。結果として阿英説が誤りであることを証明したことになる(経緯については後述)。新聞雑誌に掲載された『繡像小説』刊行広告が発行遅延を裏付けている。調べていけば商務印書館自身が発行遅延を認め新聞に謝罪広告を掲載した事実がみつかる。それらを総合すれば、結局のところ阿英の断言には根拠がなかった。

小説雑誌が記載どおりの年月に刊行されるとは限らない。現代でも表示の1ヵ月前に出版されるなど普通のことだ。

『繡像小説』についても単に発行が遅れただけだと研究者は考えるらしい。そこに重要な問題が潜んでいるとは理解できていない。反応が鈍い理由だろう。

『繡像小説』のばあいはその事情が基本的にほかと異なる。ただの発行遅延におさまらない問題を抱えている。簡単に紹介しよう。

刊行年月日が主編李伯元の死去と関係する。発行遅延は該誌に連載していた李伯元(筆名は南亭亭長)の作品に影響を及ぼす。著者問題だ。これに別の作品との盗用問題もからんでくる。実際は複雑なのだ。ただの発行遅延とはまるで違う。従来からそのように指摘し続けている。研究者の反応がないだけ。これが現実だ。

21世紀になって中国の研究者もこの発行遅延という点についてだけはその事実があることは認めるまでに変化した。従来は無視していたから大きな進歩だ。ただし、発行遅延の事実を確認しただけで、以前から提出されている問題については独自の意見がない。なぜそうなのか意味が不明だ。

#### 問題の所在と研究者の反応

問題とは、李伯元死後に出現している作品の著者にかかわる(本稿では李伯元生前の『繡像小説』主編問題は取りあげない)。

李伯元の死後も『繡像小説』は刊行されていた。ならばそれに掲載された南亭亭長(=李伯元と考えられてきた)の署名がある「文明小史」ほかの作品は誰が書いたのか。死者は原稿を作らない。雑誌の発行遅延は、南亭亭長という筆名を使用する人物が李伯元だけではないことを示している。これが、すでに提出されている問題のなかのひとつである。

『繡像小説』発行遅延を検証するいくつかの論文を読んでも納得がいけないのが正直なところ

ろだ。長年にわたり南亭亭長問題を提起しつづけているが、中国の研究者はなぜこれほど無反応無自覚なのかと思う。「発行遅延がわかった時点で思考が完全に停止している。李伯元の死去がその発行継続途中で発生している事実とその影響について考えていない」(『清末小説二談』2017年。660頁)と私は書いた。問題を問題だと感じない理由はなんだろうか。

具体的な名前を出す。文迎霞(2006)、陳大康(2002、2010、2014)、王文君(2014、2016)らの文章だ\*1。

『繡像小説』発行遅延説は1985年に出現した。中国の張純が提起し私も何度か問題にしている。ようやく公表された比較的詳しい文章が2006年の文迎霞論文だ。反応を示した中国人研究者の論文であっても日本で発表されるものには含まれていない\*2。約20年間という研究時間差が生じている。どうしてそうなったのか。

広い中国で多数の研究者がいる。論すべき膨大な課題がある。だが清末小説研究の分野はもとから寒々としていた。興味を持つ研究者は少ない。話題にならないのは理解できる。また、『繡像小説』は雑誌だから出版研究に分類される傾向がある。1986年に『繡像小説』の主編が李伯元であるかないかについて特集を組んだのは『出版史料』誌だった。視野を広げれば作品とその掲載雑誌という関連で結びついているのではないか。そこを見れば、文学研究者の関心を引かなかつたのは不可解といえる。

中国の学界では作品について立論することが重視される。だが、他人の代作が混在している作品をひとりの著作として論じることはできない。作品研究の基礎である。『繡像小説』発行遅延説はその根本のところには立ちだかっている。その重大問題をなぜ無視できるのだろうか。だから不思議だといっている。

とりあえず発行遅延問題があることを中国学界が認識したところから以下に紹介する。

文迎霞は、新聞広告を資料に使用して次のよ

うな結論をくださった。

[文迎霞36頁] 光緒三十二年三月、『新聞報』に掲載された刊行広告は第53、54期だけだった。全72期が刊行されたという広告は同年十二月(1907年1月)ようやく出現したのだ。ゆえに1906年4月に停刊したという説明は成立しない。

光緒三十二年三月份、在《新聞報》上刊登的還只是第五十三、五十四期的雜誌刊行廣告，全部七十二期出齊的廣告到該年十二月(1907年1月)才出現，因此，1906年4月停刊的說法是不能成立的。

文迎霞が書いている「1906年4月」は陽暦だ。陰暦「光緒三十二年三月」を大ざっぱに置き換えたもの。「1907年1月」も全部が新暦だ。また「1月」だけでは不正確。同年旧暦十二月は新暦の2月12日まで含むからである。

清朝末年まで中国社会は陰暦を使用していた。わざわざ説明するまでもないだろう。三月とは李伯元の死去をも指す。『繡像小説』が第72期を出して停刊したとされていた三月だ。その三月の新聞広告には『繡像小説』第53、54期しか見えない。文迎霞はここで三月停刊という阿英説を否定した。

はるか以前に結論は得られている。文迎霞が追跡調査して発行遅延を確認したというのであれば意味もあるだろう。しかし、李伯元死後も『繡像小説』が継続刊行されていたという事実をどう考えるか。これについては意見表明がない。問題のひとつはすでに提出してある。南亭亭長「文明小史」が李伯元死後も発表されているから、南亭亭長 = 李伯元という従来の説明ではおさまらない。それをどう考えるか。文迎霞論文にはあるべき思考がうかがわれないので私は落胆する。

陳大康のばあいは、最初から矛盾する説明をしている。文献を無断借用しただけで内容を検

討せず配置したからそうだったようだ。その説明も昔と今のふたつにわかれる。

昔とは、陳大康が阿英説を疑わず従来どおりの説明をしていた2002年を指す。今とはすなわち2014年、新聞広告を資料に使用しその結果発行遅延説を表明したことをいう。阿英説を信じて間違っていた過去と阿英説から抜け出しかけてやはり部分的に誤る現在のふたつを対照してみると興味深い。

先に過去の説明を見る。

陳大康『中国近代小説編年』(2002。注を参照)の155頁に李伯元が死去したと記述する。

[編年155] (光緒三十二年三月)十四日(4月7日)李宝嘉卒(1867-1906)。

この記述は正しい。基本的事実である。

問題になるのは次の部分だ。同じページの日にち不詳部分にまとめて「《繡像小説》至此停刊」と説明する。『繡像小説』第72期は刊年の記載がない。2002年当時、陳大康は阿英の断言どおりに三月十四日の李伯元死去により雑誌が停刊したという仮説が正しいと信じている。だから、三月の項目に停刊を配置した。

その時の陳大康は『繡像小説』発行遅延説など眼中にはなかった。1980年代から発行遅延が問題提起されていることを知っていたとすれば無視した(後述)。

李伯元は「活地獄」も連載している。伯元が死亡する直前(と考えられていた)の第40-42回(第70-71期)は蘭叟(吳趸人、沃堯)が、第43回(第72期)は茂苑惜秋生(歐陽鉅源)が続作した。他人に執筆をまかせるほど李伯元の病気が重くなっていたと陳大康は考えた。光緒三十二年二月の日にち不詳部分において次のように説明している。

[編年153] 第70、71号に「活地獄」第40-42回が掲載された。該作品はもとは李宝

嘉の著作であるが、彼は病気が重くなったため執筆することができず、吳沃堯(署名は蘭叟)が執筆した。

第七十至七十一号刊出《活地獄》第四十至四十二回、此作原系李宝嘉撰、因病劇不能執筆、由吳沃堯撰、署名“蘭叟”。

李伯元は病気が重くなったため執筆することができなくなった。それで吳趸人に続作を引き継いでもらった。つまり李伯元は生前に自分の判断で継続執筆を他人に任せたと解釈だ。これが陳大康を含む多くの研究者が行ってきた従来からの一般的な説明である。その基本には李伯元の死去と『繡像小説』の停刊を結びつけた阿英の断定があるのはいうまでもない。

これだけなら単に陳大康は阿英説を継承していたで終わる。一応の説明にはなる。

ところが、上の説明とは異なることを陳大康自身が自著のそれより前の部分に書いているから話が混乱する。

[編年100] 李宝嘉が病気で死去したため(注:活地獄)第40-42回は蘭叟(吳沃堯)が続作し70、71期に掲載された。茂苑惜秋生(歐陽鉅源)は第43回を続作し『繡像小説』終刊の第72期に掲載されたが未完である。

因李宝嘉患病故世、第四十至四十二回由蘭叟(吳沃堯)続作、載於七十、七十一期、茂苑惜秋生(歐陽鉅源)続作第四十三回、載《繡像小説》終刊之第七十二期、仍未完。

ここでは吳趸人と歐陽鉅源が続作したのは李伯元の死後だとする。同一書籍のなかで一方が死後で別の箇所では生前の作品執筆継続だ。陳大康の記述は前後で矛盾している。

この時、陳大康は『繡像小説』発行遅延説を知らないはずだ。参考文献の明示がないからそ

う見える。ゆえに李伯元が死去して『繡像小説』は停刊したと信じている。停刊した『繡像小説』には吳趸人、歐陽鉅源が続作した「活地獄」が掲載された。だから李伯元が生きているうちに他人が代筆したというのは理解できる。その一方で、吳趸人、歐陽鉅源らによる続作は李伯元の死後だと説明してはつじつまが合わない。陳大康は立論の整合性を考慮しないのだろうか。不思議な感覚だ。

陳大康が示したこの明らかに矛盾する記述には「典拠」があるといえは意外だろうか。

王学鈞「李伯元年譜」(1997)\*<sup>3</sup>である。

王学鈞は、発表された『繡像小説』発行遅延関係論文を丹念に調査収集した。これには張純と樽本の細かな文章も含む。「李伯元研究資料篇目索引」に列挙しているからわかる。『繡像小説』発行遅延説があることも王学鈞は十分に承知している。ただし承知していることとそれに賛成することは別だ。

発行遅延説について王学鈞はなぜだか完全には肯定していない。阿英説を全面的に否定することには抵抗を感じたらしい。無理もない。学界の権威である阿英が間違っているなどは普通の研究者は想像すらしないだろう。ましてや最初に問題提起したのが張純という新進気鋭の人物だ。加えて賛同するのが外国人の樽本である。中国人研究者が率直に興味を示さないのもわかる気がする。

王学鈞は発行遅延説が提起されていることを承知している。だがあくまでも可能性があるというにとどめる。もしかしたら発行が遅延していたかもしれないと説明する。言ってみれば中途半端なままに終始した。その典型的な説明が次の箇所だ。

発行遅延説を受け入れたような、そうでないような、あいまいに記述した部分を示す

[王学鈞216頁] 李伯元が病気になり亡くなったためその長篇小説「活地獄」は第

39回で中断した(『繡像小説』第69期丙午二月, 1906年3月)。繭叟すなわち吳趸人が第40-42回を続作し(『繡像小説』第70-71期連載)、さらに茂苑惜秋生(歐陽鉅源)が第43回を続作した(『繡像小説』第72期丙午三月, 1906年4月)。全43回が成ったが完成していない。

因李伯元患病、病故, 其長篇小説《活地獄》写至第三十九回中断(載《繡像小説》第69期, 丙午二月, 1906年3月)。由繭叟即吳趸人続写了第四十至第四十二回(連載於《繡像小説》第70至71期)。又由茂苑惜秋生(歐陽鉅源)続写了第四十三回(載《繡像小説》第72期, 丙午三月, 1906年4月)。共成四十三回。没有写完。

李伯元が「病気になり亡くなった[患病、病故]」。そこで吳趸人と歐陽鉅源が引き継いで執筆した。王学鈞が書いたこの部分を陳大康は無断借用したわけだ。これを見れば陳大康は2002年の時点で『繡像小説』発行遅延説を知っていたことが判明する。しかし、上の説明が矛盾していることに陳大康は気がつかなかった。

王学鈞の説明ではあきらかに齟齬が生じている。三月に李伯元が肺病で死去し吳趸人と歐陽鉅源が続作した。ここは『繡像小説』発行遅延説を採用したように見える。ところが日付が阿英説を引きずる。歐陽鉅源の第43回を掲載した『繡像小説』第72期の刊行を阿英が断定した三月だと書いてしまう。『繡像小説』第72期が三月発行であれば、その直前まで李伯元は生きていた。李伯元死後に吳趸人、歐陽鉅源が続作したと説明しては矛盾する。

王学鈞は阿英説を遵守しているように見えるが発行遅延説を否定しない。その部分を引用する。

[王学鈞216頁] 本月(注:三月)李伯元逝去により『繡像小説』は第72期を出版

して停刊した。第72期は丙午三月と明記しているが記された日には必ずしも『繡像小説』が停刊した本当の日にちであるとは限らない。事実上は出版が遅れていた可能性がある。

本月、因李伯元逝世、《繡像小説》停刊、出至第72期止。第72期署丙午三月。但所署日期未必是《繡像小説》停刊的真实日期、事实上可能出版滞後。

王学鈞の大きな勘違いはここにある。「第72期は丙午三月と明記している[第72期署丙午三月]」と説明した。『繡像小説』は第13期より発行年月日を記載しなくなった。第72期の雑誌そのものに刊年の記載はない。これが常識だ。王学鈞はどういうわけかその基礎事実を忘れた。専門家でも勘違いすることはあるという例だ。

2014年、陳大康は過去の矛盾し誤った自説には触れず、まるで当たり前のように『繡像小説』発行遅延を持ち出してきた。

[編年 970] (光緒三十二年三月) 十四日 (4月7日) 李宝嘉卒 (1867-1906)。

ここは[編年155]と同じ。重ねて示すのはこれが基本となる事実だからである。

陳大康の以前とは異なる新しい部分は、発行遅延をつぎのように記述したところだ。

[編年 1160] 該期(注:『繡像小説』第72期)は出版時間を表示していない。

『新聞報』十二月十七日の広告によれば当然本月(注:十二月)に出版された。

該期末標出版時間、據《新聞報》十二月十七日廣告、當於本月出版。

2002年の説明は光緒三十二年三月停刊だった。陳大康は2014年になって説明を変えた。『繡像小説』第72期の広告が『新聞報』十二月十七日

に掲載されているから停刊した該期は光緒三十二年十二月に出版されたと判定する。

陳大康に言われなくともわかっている。新聞を資料にしてはるか昔に判明している事実である。

陳大康が当たり前のようにして提出した発行遅延だ。ところが、先に触れた李伯元死後に発表された「活地獄」について奇妙な記述をする。

光緒三十二年十二月「日期不詳之事件」部分を見てほしい。

[編年 1160] この作品(注:活地獄)はもともと李宝嘉(署名は南亭亭長)の著作である。李宝嘉は病気が重くなったため執筆することができず第70、71期に掲載された「活地獄」第40-42回は、吳沃堯(署名は蘭叟)が続作した。

此作原系李宝嘉撰、署“南亭亭長”。因李宝嘉病劇不能執筆、第七十至七十一期刊出《活地獄》第四十至四十二回、由吳沃堯統撰、署“蘭叟管”。

[編年 970] で三月十四日に李伯元は死去したと説明している。ところがずっとのちの十二月に「李宝嘉は病気が重くなったため執筆することができなくなった[因李宝嘉病劇不能執筆]」という。死者の「病気が重く」なることがあるのだろうか。

その表現はどこかで見たおぼえがあるはずだ。2002年に陳大康は、李伯元が生存している光緒三十二年二月のこととして説明していた([編年153])。2014年になってその同じ説明文章を使いまわした。使いまわしたことを非難しているのではない。事実を記述するばあいは同じ表現になることもあるだろう。だが陳大康についていえば、李伯元が生存していた時の説明を変更しないまま彼の死後にも再度使用した。当然、前後のつじつまが合わない。そのことを言っている。



あまりに珍妙なのもういちど見る。陳大康がここで説明しているのはあり得ないことなのだ。李伯元は三月に死去している。その十ヵ月後の十二月時点で彼の病気が重い、と述べる。死者の病気が重いとは意味不明であるとなん度でもいう。そのことに陳大康はなぜ気づかないのか。

さらに奇妙なのは、[編年100]で記述したことを[編年 596]でもふたたび利用していることだ。ここも使いまわしである。

内容が同じだから訳さない。

[編年 596] 因李宝嘉患病故世，第四十至四十二回由繭叟（吳沃堯）続作，載於七十、七十一期，茂苑惜秋生（歐陽鉅源）続作第四十三回，載《繡像小説》終刊之第七十二期，仍未完。

この部分は、もともと王学鈞論文からの無断借用だ。2002年のことだった。それを変更することなく2014年にも再使用した。

以前の説明では基本的に阿英説を信奉していたから事実と整合しなかった。ところが、『繡像小説』発行遅延説を取り入れると昔は間違っていた記述が、こんどは偶然正解になってしまった。もとの王学鈞論文が矛盾していたから過去では不都合だったが現在は合致するという奇妙な現象が生じたというわけ。

陳大康は自らの広告調査を示しながら「活地獄」について前後矛盾する説明をした。いわば、自分が以前に記述した説明にふりまわされている。阿英説にしたがった結果誤って説明した部分を、阿英説を否定したあとも訂正することなく再度利用したからだ。この事実は、李伯元死後の作品について陳大康が何も考えていないことを証明している。別のいい方をすれば、既存の論文から無断借用しただけで昔も今も内容の検討をしていない。立論の前後が矛盾なく成立しているかどうか点検しなかった。陳大康は該

書の著者として名前を掲げている責任者なのだ。他者に責任を転じることはできない。

そういえば、海賊版『官場現形記』の犯人について陳大康が示した断定に強い違和感を覚えたことがある。2015年のことだった。

『官場現形記』の海賊版を刊行した犯人がいる。これに対して著者の李伯元が告訴して裁判になったという事件だ。

ここでも新聞の出版広告が資料として役に立つ。

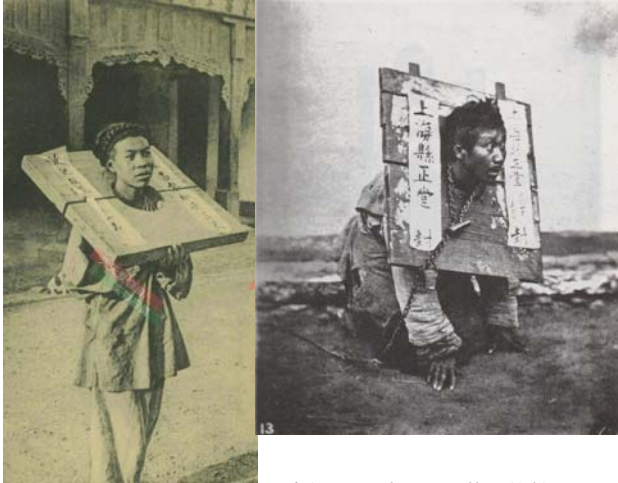
海賊版犯人は、日本と日本人を前面に押し出した出版広告を新聞に堂々と複数回掲載した。あたかも日本の業者であるかのように装った。広告の表面だけを追跡すれば、李伯元が日本の出版業者を訴えたように見える。それをうのみにする人が実際に出てくる。

陳大康に先行する論文は劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」(2006)\*4である。劉穎慧は新聞広告を手がかりにして海賊版裁判の存在を明らかにした。それまで詳細が不明だった事件に光を当てた。すぐれた論文だ。私は該論文を高く評価する。

だが残念なことに調査が不足している部分がある。広告とは別に裁判記事が複数の新聞（『中外日報』1904.11.22 / 同日『時報』 / 同日『同文滬報』）に掲載されていることに気づかなかった。広告を追跡することだけに集中した結果、裁判結果を報道する記事にまで注意がとどかなかったということだ。ゆえに裁判の結果についての詳細な説明はない。ただし、劉穎慧は裁判結果を知らないだけで勝手な空想をしていない。余計なものをつけ加えなかった。そこは研究者として良心的だということができる。

裁判記事は、犯人が中国人の席粹甫であると明記している。新聞の出版広告に名前を出したその人だ。犯人席粹甫が日本人になりすまして海賊版を印刷販売したのが真相だった。「日本人になりすまし[冒日本人(之)名]」という事実は新聞広告には出てこない。報道記事だけ

に見える。日本および日本人は利用されただけ。海賊版にはまったく関係がない。裁判の途中から日本人の姿が消失する理由である。犯人席粹甫には首枷見せしめ三日の刑(枷示三天)の判決が下った。



首枷の例 孔夫子旧書網より引用 / (英) 約翰・湯姆遜著、徐家寧訳『中国と中国人影像』桂林・広西師範大学出版社2012.11 / 2013.2第三次

問題は陳大康のほうである。

陳大康は劉穎慧と同じ新聞広告を資料に使用した。犯人が掲げたその広告では版元が日本の会社であるとうたっている。しかも、広告文中に東京金港堂の名前を引用する。陳大康はその日本という単語にこだわった。裁判の途中で日本人が消失したことをいぶかってもいる。結果として中国人の席粹甫だけが罰せられたことに陳大康は大いなる不満を表明した。ついにはあることが陳大康は海賊版の主犯が東京金港堂だと断言したのだ<sup>\*5</sup>。

立論の根拠は海賊版犯人が出した出版広告であるらしい。「らしい」と表現したのは陳大康が根拠を示さないからだ。このどこに信憑性があるというのだろうか。陳大康は犯人の発言を頼りにその表面だけをながめて結論を下した。

陳大康は劉穎慧と同様に裁判記事があることを知らない。それには犯人席粹甫が「日本人になりすまし」と明記してある。肝心の裁判の

結末についての知識を持たない。ゆえに陳大康は犯人が打った広告に出現する日本人と日本の出版社が真犯人だと勝手に思い込んだままでいる。証拠はもともと存在していない。さらに、日本人は狡猾だから、などと研究とは無関係かつ根拠不明で奇妙なことまで書いている。

陳大康には劉穎慧と同様に調査した事実を述べるだけで終わる選択肢があった。ところが、陳大康は目についた広告、それも犯人が出稿した広告に見える「日本」「東京」に過剰反応した。ただ自由に空想妄想して金港堂主犯説を捏造した。常軌を逸した奇怪な説明である。根拠のない断定をしたといわざるをえない。陳大康自らが自分は研究者ではないと宣言したのかわらない。

裁判記事を欠いたところまで同じ新聞広告を使用しながら、陳大康と劉穎慧は異なる判断を下したことがわかる。

劉穎慧は研究に徹して新聞広告だけを紹介した。一方の陳大康はなぜだか知らないが研究の道を足蹴にし暴走した結果、妄想捏造の暗黒世界に自分から跳びこんでいった。指導される学生<sup>\*6</sup>よりも指導する教授のほうが冷静さを欠いている。

もうひとつ指摘しなければならないことがある。陳大康は、当時の李伯元を取りまく状況についてなにも把握していないらしい。普通に考えればありえないことを妄想捏造した理由だろう。

海賊版問題が発生する以前にいくつかの事柄が前後してほとんど同時期に進行していた。光緒二十九年(1903)のことだ。便宜的に番号をつけて説明する。

1 光緒二十九年、李伯元は上海の『世界繁華報』に「官場現形記」を連載しはじめた。連載途中で12巻(回)がまとまると自ら主宰する世界繁華報館から線装活版単行本での出版を開始した。初編12巻は光緒二十九年八月十六日の発行だ。その後も継続刊行している。

2 その少し前、商務印書館編訳所所長張元済は世界繁華報館主人李伯元に手助けを求めるつもりだという手紙を書いた\*7。そうして創刊されたのが『繡像小説』だ。主編はいうまでもなく李伯元である。創刊号は癸卯(光緒二十九年 1903)五月初一日発行だ。

3 商務印書館の夏瑞芳は以前から日本金港堂との合弁を準備していた。正式な合弁会社になったのが光緒二十九年(1903)十月初一日だった。

4 光緒三十年(1904)六月、犯人席粹甫が日本吉田太郎『官場現形記』12巻1冊洋装本を日本知新社の名称を使用して印刷販売した。これに対して李伯元が裁判を起こしたという経緯である。

1の『官場現形記』が4の海賊版につながる。2で商務印書館と李伯元が関連する。3で商務印書館と金港堂が結びつく。つまり海賊版裁判が発生した時、商務印書館、李伯元、金港堂の3者は同じ組織のいわば仕事仲間だった。よりにもよってその金港堂がなぜ李伯元本の海賊版を出す必要と理由があるというのだろうか。裁判の結果有罪の判決が下った犯人席粹甫と日本金港堂との接点は、どこにも見いだすことはできない。無関係なのだ。

陳大康は、犯人席粹甫が出した出版広告に金港堂の名前があるのを見ただけで海賊版作成の主犯は金港堂であると短絡し断定し主張した。

犯人の出版広告になぜ金港堂が出てくるのか。これについて説明する。

その出版広告には「日商朝日洋行知新社発行所」とある。犯人がでっちあげたものだ。東京金港堂と契約を結び該社の刊行物を販売すると述べる(「東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售處此佈」『中外日報』1904.10.15)。犯人席粹甫は東京金港堂が実在していることを知っていた。事実、商務印書館自らが広告したことがあった。犯人席粹甫はそれを覚えていたのは確かだ。

商務印書館と金港堂が合弁会社になったとき、商務印書館は合弁の事実を宣伝しなかった。当時の中国社会に向けては隠しておきたい事柄だった。そのかわり「日本東京金港堂代理店」になったと広告した(『申報』1903.12.30 / 『上海週報』1904.1.1)。犯人席粹甫はそれをそのまま盗用し自分の広告文に書き込んだだけ。実在する金港堂を宣伝に利用して自社広告への信頼性を高めようとしたのが目的だとわかる。すべては虚偽である。犯人の文章に出てくる東京金港堂は名前を悪用された被害者だ。ところが陳大康の主張によれば海賊版の主犯になる。わけがわからない。金港堂が主犯であるというならば、その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはあると私という理由だ。

商務印書館と金港堂が合弁会社であった事実について陳大康は知識を持たないことが明白だ。知らないからこそ出てきた珍説だと私は判断している。証拠も根拠もなく日本金港堂に濡れ衣をきせた。同時に日本人を貶める言辞を書き連ねた。

いかがなものかと思われる陳大康の記述2例を紹介した。2例もあれば十分だろう。不注意と無責任な執筆姿勢は変わらないらしい。自爆するのも無理はない。

王文君は『申報』に掲載された出版広告、受贈感謝記事(『繡像小説』第 期を受け取った、感謝、という編集部の記事)を丹念に拾い上げた。新聞の種類を増やすことによって『繡像小説』発行遅延の事実がより精密に浮かび上がってくる。ただし、停刊については発行遅延説を再確認するだけだ。

王文君へは著者問題が発生することを本人に直接指摘した。ところがそれに反応しない。興味がないのか。応えないのは著者問題など存在しないという認識がもしもない\*8。

陳大康にもどると、彼は『繡像小説』発行遅延説について先行論文があることを完全に黙殺した。研究の蓄積を軽視すると探索が継続され

ず深化しない。そのことが理解できないようだ。

そういう状況のなかで次の論文が公表されていることをウェブ上で偶然に知った。劉霞「關於《文明小史》的刊行時間」(2012)\*9である。罍

【注】

1) 詳細は次のとおり。文末の「参照」と重複する文献がある。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15

陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社2002.12。略号[編年]

「中国近代小説史料 《繡像小説》中小説史料編年」『文学遺産 網絡版』。劉霞によると2010.4.5(未確認) 電字版 『新聞報』広告を主として採録する。次に吸収された

『中国近代小説編年史』全6冊 2014.1。略号[編年]

王文君「就《申報》刊《繡像小説》廣告 與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号 2014.7.1

「再議《繡像小説》的停刊時間 讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」『中国海洋大学学報(社会科学版)』2016年第2期 2016.3.10

2) たとえば次の論文がある。郭浩帆「《繡像小説》創辦、刊行歴史追溯」『清末小説』第23号 2000.12.1。2017.5.24ウェブサイト「読国学」に転載

3) 王学鈞編著『李伯元年譜』薛正興主編『李伯元全集』第5巻 南京・江蘇古籍出版社1997.12

4) 劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』2006年第3期(総第185期) 2006.5.(15)

5) 陳大康「論近代小説傳播中的盜版問題」『文学遺産』2015年第1期 2015.1.15。反論は次のとおり。樽本「注目点4:『官場現形記』の海賊版」『清末小説から』第119号 2015.10.1、35-42頁。要旨:『官場現形記』海賊版について陳大康が珍説を発表している。珍説とは、海賊版を作成したのは日本金港堂だと断言したことだ。証拠は存在しない。新聞広告に出てくる単語を組み合わせ作りあげた妄想捏造である。妄想捏造だという根拠はなにか。日本

金港堂は当時商務印書館との合併会社だったからだ。商務印書館が刊行する雑誌『繡像小説』の主編が李伯元だ。李伯元が執筆刊行している『官場現形記』をなぜ商務印書館との合併会社である金港堂が盗んで印刷するだろうか。海賊版作成の主犯が金港堂であると主張するならば、その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはある。陳大康著『中国近代小説編年史』の書評の一部を先行発表した。残りの部分は未発表。陳大康の珍説を読んで発表する気が失せたからだ。『清末小説二談』所収

6) 劉穎慧『晚清小説広告研究』の作者簡介に「師從陳大康先生」とある。

7) 樂偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館の小説因縁拾遺 《繡像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期(総第174期) 2014.1.15。汪家燊は『繡像小説』主編李伯元説に強く反対していた。商務印書館が新聞広告を出して李伯元を主編に招いたと書いているが、それにも疑問符をつきつけた。商務印書館自身の証言を否定する意味がわからない。汪家燊が反対する大きな根拠は、張元済が「品行不良」の李伯元など招聘するはずがないという勝手な思い込みだ。その思い込みは、樂偉平が発掘した張元済の夏曾佑あて手紙に李伯元の名前があることによってあっけなく泡のように消えた。

8) 樽本「王文君氏へ 『繡像小説』発行遅延問題について/附:『繡像小説』刊行一覧」『清末小説から』第114号 2014.7.1、37-42頁。『清末小説二談』2017収録時に改題して「『繡像小説』発行遅延問題について 王文君氏へ」要旨:王文君が『繡像小説』の刊行遅延説について調査した。その結果、樽本の示した『申報』広告の記事掲載月日に不正確な箇所がある、と批判するのだ。その事実を認める。ただし、いくつかの誤記は、刊行遅延説を否定するまでにはいたっていない。誤差の範囲内におさまる。王文君に反論して、目先の事実精密であろうとして、調査を行なう本来の目的を見失った、という。なんのために調べるのか。樽本説を否定できる新しい発見がないではないか。『清末小説二談』収録時に樽本「王文君論文について」(清末小説研究会ウェブサイト2016.9.4に掲載)を追加する。要旨:王

文君が『繡像小説』の発行遅延問題を取りあげている。以前の論文の焼き直し。停刊時間に問題を絞った。しかし、停刊時間についてはすでに結論がでていいる。新しい発見であるということとはできない。また、以前の論文において樽本が指摘した問題を無視する。畢樹棠論文を魏紹昌編の資料集から引用して間違う。魏紹昌が肝心の雑誌停刊年月について書き換えた事実を知らないからそうだった。研究の基本を実行していないのもよくない。

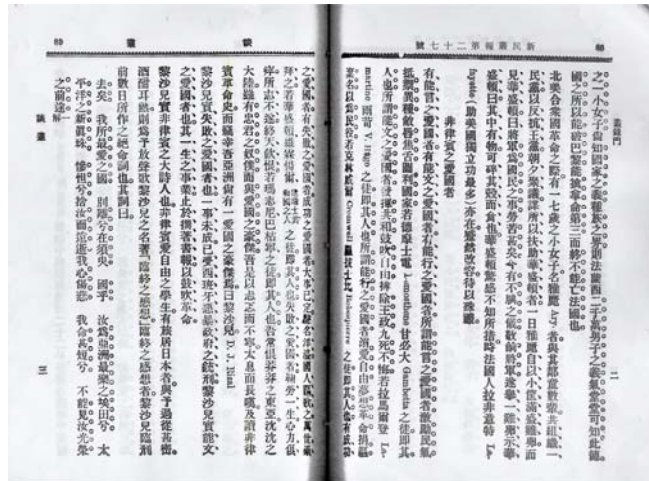
9) 劉霞「關於《文明小史》の刊行時間」『現代語文』2012年第1期(総第454期)2012.1.5 電字版

漢訳リサール辞世詩3完  
魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪

荒井由美

略号は【君武】

馬君武の「非律賓之愛国者」である。「茶余隨筆」(『新民叢報』第27号1903.3.12)と題された3篇のなかのひとつだ。署名は君武。



フィリピンの愛国者とは、黎沙兒(リサール)を指す。リサール「臨終之感想」を知ることになった事情を少し書いているから関連する2カ所を引用する。

フィリピン革命史を読んで、わがアジアには幸いにも愛国の豪傑がひとりいることをひそかに喜んだ。リサール(黎沙兒) D. J. Rizal という。3頁

彭小妍主編『跨文化流動的弔詭 晚清到民国』  
台湾・中央研究院中国文哲研究所2016.11  
中国文哲專刊46  
歴史演義小説の跨文化弔詭 林紓和司各徳 ..... 李欧梵  
近代翻訳家庭小説中女性社会身份の解離と重構 從  
《女人之過》到《空谷蘭》 ..... 潘少瑜  
翻訳「教師」 日系教育小説中受到雙重文化影響的  
教師典範 ..... 陳宏淑  
接受与轉化 試論偵探小説在清末民初(1896-1916)  
中国的訳介与創作 ..... 蔡祝青  
翻訳・尤物 上海新感觉派与「満洲国」藝文志派作  
家 ..... 柳書琴  
《新未来記》在日本的訳介与生成意義 ..... 吳佩珍  
英国獵犬乎, 西藏獒犬乎, 抑或雜種犬乎  
THE HOUND OF THE BASKERVILLES 三部清末  
民初中訳本研究 ..... 鄭怡庭  
王国維《紅樓夢評論》中的三個終極目的  
..... 胡宗文、蔡自青  
《創化論》的翻訳 科学理性与「心」的辯証  
..... 彭小妍

リサールは、まことにフィリピンの大詩人である。フィリピンの自由を愛する学生で日本に滞在する者がいて私は彼とともに密接に交際した。酒に酔い興がのつてくると私のためにリサールの名作「臨終の感想」を大声で歌った。「臨終の感想[臨終之感想]」とは、リサールが処刑される数日前に作った辞世詩[絶命詞]である。同上

原文で「非律賓革命史」というのはなにか。もうひとつ、フィリピン学生が歌った原文「臨終之感想」は、何語なのか。

後者から考える。

フィリピン人同士ならばスペイン語の原詩であるのがわかりやすい。タガログ語の可能性もある。しかし、中国人の馬君武のために歌ったというのだ。馬君武に理解してもらうためには日本語を使用しただろう。英語ならばまだ考慮の範囲内だ。フィリピン人が漢訳を歌うとは考えられない。

1901年、日本に来る前の馬君武は、英語とフランス語を学習している\*23。

最初の英訳は、1898年にシンガポールで刊行されたリサール伝記の中にあるという\*24。

刊行の時期を見れば馬君武がこの英訳を読んだことも考えられなくはない。ただし、シンガポールから該書が日本に輸入されたかどうか確かめるのはむづかしい。

ここは馬君武らが居住していたのが日本である事実を重視すべきだ。馬君武が文章を発表した1903年以前であることに注目する。リサールを紹介した文章で日本で読むことができそうな書物は以下のものがある。

- 1【宮本】日訳『南洋之風雲』(1901)は「ドン、ホセー、リサール氏伝」。「臨終の辞」あり。説明して「我が臨終の感想」
- 2【美妙】『(比律賓独立戦話)あぎなる

ど』。「わが末期のおもひ」あり。

3【呉超】漢訳『比律賓志士独立伝』(1902)は「利刹乎羅氏伝」。リサール辞世詩「臨終之感想」あり。

4【同是】漢訳初版『飛獵濱独立戦史』(1902。のち改訂版『菲利濱独立戦史』1911)は「利沙魯氏伝」。リサール辞世詩なし。

以上の4種類のうち4番目の『飛獵濱独立戦史』は、リサール辞世詩を漢訳していない。考察の対象からはずれる。

日訳は、1と2だ。両者ともフィリピン人学生が馬君武に歌って聞かせた可能性はある。美妙の日訳は、高唱するのに向いているかとも思う。

馬君武が漢訳したリサール辞世詩は、その基本が宮本日訳の『南洋之風雲』にあるということは間違いなからう。それに加えて呉超漢訳は無視できない。

馬君武が行なった説明をもう一度見なおす。すなわち「「臨終の感想[臨終之感想]」とは、リサールが処刑される数日前に作った辞世詩[絶命詞]である」だ。この原文を示す。「臨終之感想者。黎沙兒臨刑前数日所作之絶命詞也」である。

ふたつの部分に注目する。「臨終之感想」と「黎沙兒臨刑前数日」である。どこかで見たことのある表現だと思われるだろう。

再度、呉超より引用する(下線は筆者)。

【呉超】氏處鎗刑之前数日。於獄中賦有詞。因觸臨終之感想。而以此遣懷者。凡有志之士讀之。誰不為之一掬其淚哉。其詞曰。  
(注:このあと漢訳が続く)14頁

下線部分がほとんど一致しているのは明らかだ。馬君武は、リサール辞世詩を漢訳する時、宮本日訳と呉超漢訳を参照したと考えていいだろう。そうすると、もうひとつの疑問が解決す



る。すなわち、馬君武が書く「非律賓革命史」は、『南洋之風雲』を指すと判断する。

呉超訳と馬君武訳(日本語訳をつける)のふたつを並べる。呉超訳の底本が『南洋之風雲』であるから宮本日記もあらためて示す。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し  
東海之真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、  
我は今汝を跡にして逝かんとす。慘怛たる我生命は  
汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く  
光栄あれば  
尚汝の前途を守護せむに。(汝とは本国を指す以下皆然)

【呉超】最愛之本国兮。浴天恵  
比東海之真珠。思患定之樂園兮。  
念本国而不止。慘怛我之生命兮。  
去本国而有何喜。我生而多光栄兮。  
尚守護本国之前途。

【君武】去矣 我所最愛之國 別離兮在須臾  
さらば 我が最愛の國よ もうすぐお別れだ  
國乎 汝為亞洲最樂之埃田兮 太平洋之新真珠  
國よ 汝はアジアの最も楽しきエデンだ  
太平洋の新しい真珠だ  
慘怛兮 捨汝而遠逝 我心傷悲  
悩ましい 汝を捨て遠くへ逝く 我が心は悲しい  
我命甚短兮 不能見汝光栄之前途ノ一解  
我が命ははなはだ短かった 汝の光栄の前途を見ることはできないのだノ1連

馬君武の漢訳に見える「最愛」「汝」「真珠」「慘怛」「捨」「逝」「光栄」という単語は、宮本日記と共通する。それは、当然ながら呉超漢訳ともほとんどを共有している。

ただ、行数が一致しない。宮本日記の「天恵に浴し」がない。「汝のために捨つるを喜ぶ」の「喜ぶ」もない。書き換えて、自分の心が傷つき悲しいだけ。「汝の前途を守護せむに」ではなく「汝の光栄の前途を見ることはできない」と悲觀的表現に書きかえる。

馬君武の漢訳は原詩とはだいぶ印象が異なる。ひたすら悲しい調子に塗り替えた。原詩にある祖国のために死ぬ喜びを消し去ったのだ。

私の考えは次のとおり。馬君武の漢訳は、宮本日記と呉超漢訳のふたつを参照しながら、馬独自の創造をつけ加えて成立した。翻訳そのものではなく半分は創作だ。リサール辞世詩の大意を伝えるのが目的だったのだろう\*25。

略号は【清韻】

馬君武漢訳の直後に『南洋風雲』という翻訳書が刊行されている。目錄風に記述する。



南洋風雲

(飛律賓文豪本西氏原著) 夏清韻訳述

印刷所：東京並木活版所 光緒二十九年四月二十日(1903.5.16) 発行、五月三十日出版(注：旧曆五月三十日は存在しない。五月二十九日ならば1903.6.24) 天津図書館所蔵、出版社不明1903。また、上海図書館所蔵、東京並木活版所 光緒二十九(1903)年五月三十日

ついでながら、書名は同じだが呉烈『南洋風雲』(世界書局1941)とは別物。

訳者の夏清馥については、次に言及がある。前出潘喜顔『清末歴史訳著研究(1901-1911)』

『以亞洲史伝訳著為中心』252頁「150 江蘇人、清末留日学生、軍国民教育会会員。訳《南洋風雲》、《印度滅亡戦史》」。

『印度滅亡戦史』(開明書店1902)は孔夫子旧書網に書影が掲げている。扉に「穎荃訳稿」、本文に「嘉定夏清馥編訳」、奥付に「編訳者：夏清馥」と明記される。

また書目によれば、次の翻訳書がある。(日)三宅驥一著、夏清馥訳『達爾文』(開明書店光緒二十九(1903)年。底本は、三宅驥一『チャールズ、ダーウィン』民友社1896.10.17 世界叢書第1冊)

夏清馥については、次の名簿に名前が見える。房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』(1962)\*26の「日本留学中国学生題名録」33頁に「夏清復 穎荃ノ二十二ノ江蘇嘉定ノ二十八年十一月ノ地方公費ノ同文書院」とある。

1902年、東京に着いた。字が同じで夏清馥と夏清復は同音だから同一人物だ。また、『南洋風雲』の「序」には「上海魂序于日本東京」と署名される。この上海魂は、『江蘇』第1-2期(1903.4.27-5.27)に「説脳」上下篇を掲載している人物だ\*27。つまり、上海魂は夏清馥の筆名だと考えられる。

『南洋風雲』は、ボンセ原著の日訳『南洋之風雲』を底本にした漢訳版だ。漢訳書名からしてそのままであることがわかる。アギナルド、ボンセとリサールらの肖像写真とフィリピン群島全図を掲載している。それらは日訳版にしか収録されていない。底本にしている証拠である。ただし、本文、奥付にも原作者ボンセと宮本ら日本人訳者の名前がない。かろうじて「凡例」に「飛律賓文豪本西氏原著」と示してあるだけ。

印刷所の名前が掲げられているが出版社の記載がない。夏清馥が翻訳し制作刊行した私家版

らしい。

先の「凡例」に見える「本西氏原著」から表記の本西(ボンセ)つながりで呉超訳を参照していることがわかる。事実、同じく「凡例」に次のようにある。「今特依飛律賓志士独立伝一書ノ開明書店発行」。すでに紹介したように呉超訳『志士独立伝』の発行所は訳書彙編社だ。開明書店とするのは間違い。また、本西とだけにして「崇昭本西」の崇昭は省略している。名前だとは思わなかったのかもしれない。

『南洋之風雲』の全訳ではあるが、底本と異なる箇所がいくつもある。

日訳に多く収録してある写真は、減らして2葉のみ。上海魂序于日本東京とする「序」は新しく書き下ろした。底本の「例言」の内容を書き直して「凡例」に入れ替える。「ドン、マリアーノ、ボンセ氏伝」は未訳。ただし、ピラール、リサールと合わせて「附録：愛国文豪三大家伝」に内容を要約してまとめる。「比律賓独立軍々歌」は省略。

底本は14章に附録「志士列伝」で構成されている。しかし、夏清馥の漢訳は全16章と附録に変化している。それには夏なりの理由がある。ボンセ原著は戦史の体裁であってフィリピン全般の紹介になっていない。そこでフィリピン群島、南洋事情などの書籍から広く材料を集めて説明を加えた。しかも訳者注釈という形でかなりの分量が追加されている。原書の面目が一変した理由だ。ゆえに、ボンセ原著の日訳を基本にするととってもそれは一部にしかない。フィリピン共和国憲法101条は、わずかに合計9条を抽出しているだけ。夏清馥が自由に改編したほとんど別の著作になっているといってもいい。

前述のように底本の「志士列伝」は、「愛国文豪三大家伝」に編集しなおして漢訳した。その時、黎沙兒(リサール)「絶命詩[辞世詩]」は、『新民叢報』掲載の馬君武漢訳を引用したと注釈のでべる。呉超訳を見ているがこちらは



採用しなかった。基本的に馬君武漢訳と同じだ。少しの文字の入れ替えと誤植がある。本稿の附録に掲げておいた。

夏清馥の注釈に『飛律賓志士独立伝』すなわち呉超漢訳と馬君武の名前があがっているのは興味深い。そこから理解できることがひとつある。すなわち、日本にいた中国人留学生たちのあいだでボンセ原作『南洋之風雲』はよく知られていたという事実だ。リサール辞世詩の日訳は宮本ら、および美妙のものがある。漢訳したのは呉超、馬君武だ。それらを見れば、該書はよく知られていたとわかる。

#### 略号は【学生歌】

一般には『学生歌』と略して呼ばれるという。正式な書名は、『教育必用学生歌』正統兩編(上海・作新社 光緒三十(1904)四月)だ。ただし、該版は未見。これに、黎沙児作、訳者未署名「菲律賓愛国者黎沙児絶命詞」が収録されている。その題名については「題為訳者所加」という説明がある。

以下に収録される。

『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集3(施蛰存主編)上海書店1991.4。202-206頁収録

胡從経「愛国強音 革命暁角 作新社版《学生歌》」、『胡從経書話』北京出版社1998.1。318-319頁所収。『黎薩爾与中国』172-180頁にも収録

原本には、訳者未署名とあるらしい。もとは馬君武の漢訳だ。それを明記すべきだった。つけ加えることはない。

## 9 結 論

リサール辞世詩の翻訳は、以上のように多数ある。魯迅が読んだのはこれだ、とひとつに特定することはむづかしい。その手がかりを魯迅は提示していないからだ。あくまでも魯迅が目

にした可能性がある日訳と漢訳だということにとどまる。

まとめる。

リサールあるいは彼の辞世詩を紹介した文献は、清末の1911年までに区切れれば日本と中国において全部で7種類を数える。私が見ていない英訳はある。ただし、日本に輸入されていたかどうかは不明。また、知らない文献があると思うが、今のところとりあえず7種類だ。

日本に留学中の魯迅が読んだかもしれない、という範囲内に限定する。

はじめりはひとつ。ボンセ原作、日訳『南洋之風雲』1冊が根本に存在している。日本でのみ刊行されたという事実に注目すべきだ。残りの6種類はその1本から派生したものである。

リサール辞世詩に絞ると宮本日訳(1901)が初出だ。それに依拠した美妙日訳(1902)、呉超漢訳(1902)、馬君武漢訳(1903)の順である。夏清馥漢訳(1903)所収の辞世詩は基本的に馬君武漢訳だ。漢訳を含めてすべて日本において発表、出版された。

馬君武漢訳は全訳ではない。しかし、リサール辞世詩の漢訳には含まれる。『学生歌』(1904)は馬君武漢訳と同じだが上海での刊行だから優先順位は少し後退する。

ボンセ原作は、異民族であるスペイン人による圧制に苦しみ、そこから独立しようとするフィリピン人の苦闘を描いている。アメリカに裏切られて自らの独立運動が危機にさらされている。まさに現在進行中のフィリピン情勢を生々しく活写している作品だ。異民族の清朝に支配されている漢族の留学生たちが日本において該書を目にした時、漢訳する意義を感じたのも当然だろう。だからこそ複数の漢訳が短期間に刊行された。独立運動の過程で犠牲となったリサールの辞世詩が、中国人留学生たちに強い印象を与えたのも理解できる気がする。リサールの名前を出した魯迅は、その状況を体験した彼ならではの反応だったと考えられる。魯迅が

「雑憶」(1925)において、清朝末期に一部中国の青年には革命思潮が盛んであり、復讐と反抗を叫ぶ者は共感を覚えた、と述べたとおりだった。

魯迅が清末に見た可能性がある翻訳は、日訳と漢訳で以上のようなものである。 ㊦

【注】

- 23) 曾誠「馬君武」朱信泉、宗志文主編『民国人物伝』第7巻 北京・中華書局1993.11。陳春香「馬君武の外国文学訳介と日本影響」『広西大学学报(哲学社会科学版)』第29巻第3期 2007.6。楊麗華「第4章 翻訳家馬君武」『中国近代翻訳家研究』天津大学出版

社2011.4。81頁注1で馬君武の漢訳が作新社版『学生歌』よりも早いことを指摘する。

- 24) Howard W. Bray *Biography of Dr. José Rizal by Ferdinand Blumentritt* Singapore: Kelly & Walsh. 1898. 未見。前出 バーナド Bernad, p. 193による  
25) 熊柱、李高南校注『馬君武詩稿校注』桂林・広西師範大学出版社2016.7には未収録  
26) 房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』台湾・中央研究院近代研究所1962.4  
27) 上海魂のみについては、次に言及がある。李曉萍『晚清《女子世界》(1904-1907)中婦女知識と典範之建構』東海大学中国文学系研究所2012.6 博士論文 電字版

【附録】リサル辞世詩の翻訳対照表 清末の日訳、漢訳を中心に

(スペイン語原詩は『南洋之風雲』より引用。誤植も原文のまま。訳文の傍点、ルビは省略。くりかえし記号は書き換える。便宜のために連番号をほどこす。参考として原詩に施した日訳は安井祐一『(フィリピンの近代と文学の先覚者)ホセ・リサールの生涯』74-82頁より引用した)

MI ÚLTIMO PENSAMITENTO.

【宮本】臨終の辞(本文の説明は「我が臨終の感想」)訳者識「茲に唯原詩の意を万一に髣髴たらしめんことを期するのみ、読者乞ふ諒せよ」

【美妙】わが末期のおもひ

【呉超】無題(本文の説明は「臨終之感想」)

【同是】漢訳なし

【君武】臨終之感想(絶命詞)

【清馥】絶命詞(基本的には馬君武漢訳による)

【学生歌】菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞(題為訳者所所加)

1

Adios, Patria adorada, region del sol querida,

さようなら、愛する祖国、なつかしい太陽の地よ、

Perla del Mar de Oriente, nuestro perdido Eden!

東洋の真珠、今はなきわが楽園よ!

A darte voy alegre la triste mística vida,

喜んで、君に捧げよう、貧しく萎びたこの命を、

Y fuera más brillante más fresca, más florida,

いや、たとえ輝きにみちていて、いっそう清らかで、花咲くような私であったとしても、

E[*T*]ambien por ti la diera, la diera por tu bien.

やはり、君のために、この命を捧げよう、君のしあわせのために、この身を捧げよう。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し東海の真珠に比ぶなるエデンの楽園と思ひしに、我は今汝を跡にして逝かんと

す。惨憺たる我生命は汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光栄あれば尚汝の前途を守護せむに。(汝とは本国を指す以下皆然)

【美妙】ひさかたの

天のめぐみのいとあつき                   あゝわがみくに、此みくに、  
さてもいつくし東海の                   かゞやく真珠、イイデンの  
花のみそのに比ふべき                   そを今われはあとに見て  
死ぬをうれしと云ふ迄に                   なりぬる身かな、なりし哉。

【呉超】最愛之本国兮。浴天恵比東海之真珠。思患定之樂園兮。念本国而不止。惨憺我之生命兮。去本国而有何喜。我生而多光栄兮。尚守護本国之前途。

【同是】漢訳なし

【君武】去矣 我所最愛之國 別離今在須臾 國乎 汝為亞洲最樂之埃田兮 太平洋之新真珠 慘憺兮 捨汝而遠逝 我心傷悲 我命甚短兮 不能見汝光栄之前途 / 一解

【清馥】去矣。我所最愛之國。別離今[兮]在須臾。國乎。汝為亞洲最樂之埃田兮。太平洋之新珍[真]珠。慘憺兮。捨汝而遠逝。我心傷悲。我命甚短矣[兮]。不能見汝光栄之前途 / 一解

【学生歌】【君武】と同じ 異同箇所のみを示す 惨恒 [ 惨憺 ] [ ] 内が原文 解なし。以下同じ

2

En campos de batalla, luchando con delirio,  
戦場では、人々が烈しく戦っている、  
Otros te dan sus vidas, sin dudas, sin pesar;  
信じて、惜しまず、君に生命を捧げている、  
El sitio nada importa, ciprés, laurel ó liris[o],  
どこでもいい、糸杉、月桂樹または菖蒲の茂み、  
Cadals[s]o ó campo abierto, combate ó cruel martirio,  
処刑台とか曠野原、戦闘とかむごい殉死、  
Lo mismo es si lo piden la Patria y el hogar.  
どれも同じだ、祖国と同胞が望むのなら。

【宮本】遅疑せず、悔恨せず、国人は皆生存競争の戦場に赴く。苟且にも本国の為めとしあれば惨刑酷待に逢ふとも、陣頭の露と消ゆるとも、柏桂の木影に仆るとも、如何てか辞すべきぞ。

【美妙】いで見よかしの、はらからの 我国人のますらををは  
修羅のちまたに勇み行く。                   世のため国のためならば  
もとより何をいとふべき。                   つみ着るべきか、よし着なん  
野辺のこやしか、よしならん

【呉超】不遅疑。不悔恨。国人皆赴生存競争之戰場。苟且乎本国之為。必逢惨刑而酷待。雖消陣頭之雨露。雖仆柏桂之木影。如何可辞。

【同是】漢訳なし

【君武】不遅疑 不傍徨 我國民奮勇兮赴生存競争之戰場 人苟為本國而流血兮 消柏桂之木影暴原野之嚴霜 固不辭也 / 二解

【清馥】不遅疑。不傍徨[徨]。我國民奮勇兮。赴生存競争之戰場。人苟為本國而流血兮。消柏桂[桂柏]之木影。暴原野之嚴霜。固不辭也 / 二解

【学生歌】【君武】と同じ 傍徨 [ 傍徨 ]

3

Yo muevo cuando veo que el cielo se colora  
 黒いとばりがあがり、空があけ染めて、  
 Y al fin anuncia el día tras lóbrego capuz;  
 ついに日の出を告げるときに、私は逝くのだ、  
 Si grana necesitas para teñir tu aurora,  
 あげぼのを染めるのに紅がいるのなら、  
 Vierte la sangu mia, derrámala en buen hora  
 わたしの血で染めよう、頃よいときに撒き散らし、  
 Y dórela un seflejo de su naciente luz.  
 さしのぼる君の光で金色に照らせ。

【宮本】暗愴たる夜色去りて旭日紅を潮する比我は逝かなん。暁光の紅なるを欲せば我血を絞りて之に注ぎ以て一段の光彩を添えよ。

【美妙】物すごかりし夜は消えて 旭日まばゆくのぼる頃  
 我はこの世を去る身ぞよ。 いで天晴れの思ひ出に  
 其しの、めのそらのいる 此精血をしぼり取り、  
 色あざやかに染めてもよ。

【呉超】暗愴之夜色去。而旭日潮紅。可比我逝。暁光之紅。絞我血以注之。添一段之光彩。

【同是】漢訳なし

【君武】夜色暗澹 如悲我之将逝兮 風蕭蕭而不長 曉日何時而復出兮 将灑我一腔之鬱血以添其曙光也 / 三解

【清馥】夜色暗澹如悲我之将逝兮。風蕭蕭而不長。曉[曉]日何時而復出兮。将麗[灑]我一腔之熱[鬱]血以添[添]其曙光也 / 三解

【学生歌】【君武】と同じ

4

Mis sueños cuando apenas muchacho adolescente,  
 成人したばかりの頃の、わたしの夢、  
 Mis sueños cuando joven ya n[ ]eno de vigor,  
 すでに逞しい青年になった頃の、わたしの夢、  
 Fueron el verte un día, joya del mar de Oriente,  
 それは、いつの日か、お前を、東海の宝石を、見に行くことだった。  
 Secos los negros ojos, alta la tersa frente,  
 若者の黒い瞳は輝き、つややかな額は広く、  
 Sin s[c]enos, sin arrugas, sin manchas de rubor.  
 顔には憂いの色もなく、皺やシミもなかった。

【宮本】年漸く壮なる我夢想と血氣満々たる我夢想とは、他日汝が涕泣せず、嘔噦せず、冷眼軒眉し東海の珠宝として光輝を四表に輝かすを見んを望む。

【美妙】やがては見なん、さて見よや 汝わが国も虐政に  
 絞りし袖のつひに乾て、 眉うちのべて東海の  
 美玉のひかり世のなかに 輝かすべき日有らんを、

我はその日を見め、待ため、                   さて見め、待ため、見め、待ため、  
今より死にて見め、待ため。               無漏の夢ぞに見め、待ため。  
年若けれどこのわれの、                   血氣有れども此われの  
今は最後の夢うつゝ、                   そのうつゝにて見め、待ため。  
其うつゝにて見め、待ため。

【呉超】我夢想他日之本国。不涕泣。不嘯喊。冷眼軒眉。望東海之珠宝。見光輝照乎四表。

【同是】漢訳なし

【君武】我年漸壯兮 我心漸遠 我願未酬兮 我命將斬 我最愛之國乎 太平洋之新真珠乎 我雖死不瞑目兮 以  
觀汝揚光輝於六区也 / 四解

【清馥】我年漸壯兮。我心漸遠。我願未酬兮。我命將斬。我最愛之國乎。太平洋之新珍[真]珠乎。我[雖]死不瞑[目]  
兮。以觀汝[揚]光輝於六区也 / 四解

【学生歌】【君武】と同じ

5

Ent[s]jueno de mi vida, mi ardiente vivo anhelo,  
我が生涯の夢、今も燃え立つような私の憧れ、  
Salud, te grita el alma que pronto va á partir  
乾杯、わたしの魂が君に叫ぶ、もうすぐ出発だ、  
Salud! ah que es hea[r]moso caer por darte vuelo,  
乾杯！おお、何と素晴らしいことか、君に翼をあずけて倒れるとは、  
Morir por darte vida, morir bajo tu cielo,  
君に身を托してゆく、君の空の下で死を遂げる、  
Y en tu encantada tierra la eternidad dormir.  
そして君のうろわしい大地でとこしえに眠るとは。

【宮本】我は畢生の熱情もて思念す。ア、我が將に逝かんとするを汝は嘆かむ。ア、我は汝の飛躍自由なるを得る  
ため、汝の天を戴きて死し、永久此の楽土に靈を托するを悦ぶ。

【美妙】死にゆく我を汝や国、               さても哀と見るかそも。  
見るかそもとも思ひやり、               思ひつめつめ思へども……  
さて泣きなせそ、悲しむな。               汝のために死ぬ身なり。  
汝に自由得させんと                   思ふばかりに死ぬ身なり。  
汝をおほふ大そらの                   下はなれ得で死ぬ身なり。  
わがなき魂はとこしへに               汝の土にのこりてん、  
離れず残るそれを只                   死に行く胸のたのしみに。

【呉超】我歎畢生之熱情思念。將伸息無期。得飛躍自由。戴本国之天而逝。喜託靈魂。永久留此樂土。

【同是】漢訳なし

【君武】去矣 我最愛之國兮 我滿腔之熱情 与我身而永化 國乎 汝而終能得飛躍之自由兮 我戴汝之天以死  
遂永托靈於此土 我何憂兮 / 五解

【清馥】去矣我最愛之國兮。我滿腔之熱情兮。与我身而永化。[國乎] 汝而終能得飛躍之自由兮。我戴汝之天以死。  
遂永死[托]靈於此土。我何憂兮 / 五解

【学生歌】【君武】と同じ

6

Si sobre mi sepúlcro vieres brotar un día  
 いつか、わたしの墓に茂る草むらに、  
 Entre la espesa yes[r]ba sencilla, humilde flor,  
 ひっそり咲く花を見つけたら、  
 Acércala á tus labios y besa al alma mía,  
 君の唇を寄せて、私の魂に口づけしてくれ、  
 Y sienta yo en mi frente bajo la tumba fría,  
 すると、冷たい土の下の、わたしの額につたってくる、  
 De tu ternura el soplo, de tu hálito el calor.  
 君の息吹きは君のやさしさ、君の吐息は君の温もり。

【宮本】他日我墓上の荒草裡に一輪可憐の花開くを見ば、汝之に接吻して我靈の宿るを知れ。かくて汝の親愛なる熱情の吹嘘が冷棺中なる我額上に注ぎ来るを感ぜむ。

【美妙】やがてむぐらの我墓に 一輪の花さきもせば、  
 死にし此身のたましひの こもると見てよ、汝、国、  
 その唇をすへよかし。 思ひはとほれ、こけのした  
 眠るこの身に触れよかし。(注：次の7と合併)

【呉超】他日見我墓上之荒草。有一輪可憐之花開。本国之人接吻之。而知我靈之宿。若本国之親愛者。感熱情之吹嘘。來注我冷棺之額上。

【同是】漢訳なし

【君武】死矣 他日我墳墓之上 長一叢之荒草兮 開數枝可憐之花 国乎 汝之親愛熱情与我永不相遺 時住往於我墓上吹嘘其花草兮 我之神靈何有乎 嘆嗟也 / 六解

【清馥】死矣。他日我墳墓之上長一叢之荒草兮。開數枝可憐之花国乎。汝之親愛熱情与我永不相遺。時住往於我墓上吹嘘[其]花草兮。我之神靈何有乎嘆嗟也 / 六解

【学生歌】【君武】と同じ 一叢叢 [一叢之]

7

Deja á la luna verme con luz tranquila y suave,  
 月には、安らかな優しい光を浴びせてもらおう、  
 Deja que el alba envíe su resplandor fugáz,  
 暁には、君のそのひと時の輝きを射してくれ、  
 Deja gemir al viento con su murmullo grave,  
 風には、君のおごそかな声でうなってもらおう、  
 Y si desciende y posa sobre mi cruz un ave,  
 またもし一羽の鳥が舞いおりて、わたしの十字架にとまったら、  
 Deja que el ave entone su cántico de pa/z.  
 鳥には、平和の歌をうたってもらおう。

【宮本】安静溫柔なる月光の我を照すに任せよ。曙光の雲霧を披くに任せよ。風伯の怒号するに任せよ。鳥あり、來たりて我墓標に息れば、之をして平和の頌歌を唱ふるに任せしめよ。

【美妙】(注：前の6と合併)

静にいこふ月しるを 墓にそのまゝ宿せかし。

雲晴らしゆく朝日影                   かゞやく儘に照らせせよ。  
おたけびの声吹く風の                只荒れずさぶ儘にせよ。  
鳥もこよかし、わが墓に            とまらばとまる儘にせよ。  
平和をうたふ儘にせよ。

【呉超】安静溫柔。任月光之照映。任風伯之怒号。任披曙光之雲霧。有鳥来而息我墓。任唱平和之頌歌。

【同是】漢訳なし

【君武】委我骨於我所最愛之国之原野 我心已足兮 況有安静之月来相照映兮 溫柔之風来相披拂兮 嬌好之鳥来棲我之墓 唱和平之曲兮 此皆我国之慰我於死後者也 / 七解

【清馥】委我骨於我所最愛[之]国之原野兮。我心已足[兮]。寂寞[況有安静]之月[来]相照映兮。溫柔之風以[来相]披拂兮。嬌音婉轉[好]之鳥[来棲]以啼于[マ]我之墓上[マ]唱和平之曲兮 其[此皆我国之]慰我靈乎[於死後者也] / 七解

【学生歌】【君武】と同じ

8

Deja que el sol ardiendo las lluvias evapore  
太陽は、わたしの呼び声につづいて、燃えたち、  
Y al cielo toru[m]en puras con mi clamor en pós;  
水気を干し、空を澄みわたらせよ、  
Deja que un sér amigo mi fin temprano llore  
友は、わたしのはかない命に涙を流してくれ、  
Y en las serenas tardes cuando por mi alguien ore  
そして、晴れわたった晩、誰かがわたしのために祈りをあげているときには、  
Ora tambien, oh Patria, por mi descanso á Dios!

おお祖国よ、君もまた、私が神に抱かれて安らぐように、祈ってくれ。

【宮本】炎熱のために蒸発せる雨水の我が憤を天に伴ひ還るに任せよ。友朋の我早生を悼むに任せよ。ア、本国よ。人我がために神明に祈らば、汝亦高潔の意思を以て我極楽往生を神明に祈れ。

【美妙】暑さに雲と立ちのぼる      雨のしづくよ、かぎりなき  
怨みをつれて大そらに                伴なひかへる儘にせよ。  
年若して死ぬわれを                    友のかなしむ儘にせよ。  
あゝいつくしき我国よ、                此世の人のわがうへを  
捧むと見なば国もまた                わが安らげき終焉を  
わがため祈れ、いさぎよく。

【呉超】任炎熱之蒸發。雨水之颺零。我還伴天而憤慨。添朋輩之悲思。吁。本国有祈我於神明者。亦其高意。而我祈神明。極樂往生。

【同是】漢訳なし

【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

9

Ora por todos cuantos murieron sin ventura,  
不運の死を遂げたすべての者のために、

Por cuantos padecieron tormentos sin igual,

不当な苦しみを受けた者たちのために、

Por nuestras pobres madres que gimen su amargura,

悲運に泣いた哀れな母親たちのために、

Por huérfanos y vin[u]das, por presos en tortura,

孤児や未亡人のため、拷問に苦しんだ捕囚たちのために、祈ってくれ、

Y ora por ti que veas tu redencion final.

そして、ついに祖国に解放が訪れるよう、君自身のために、祈ってくれ。

【宮本】楽を享けずして死する人のため、無上の憂苦に煩悶する人のため、不幸をかこつ可憐なる天下慈母のため、鰥寡孤独と苛責に逢ふ捕虜のため、將た贖罪の歩趨を採れる本国のため、我は神明に祈らん。

【美妙】我はいのらん人のため、 快樂を知らで死にし人、  
うきに苦しみもがく人、 子を失ひてなげく母、  
とりことなりしをのこども、 何れ劣らぬ世の中の  
うきめを見たる人のため 我は祈らん、祈りてん、  
祈りてん、また、国のため、 ありし昔の罪は今  
つぐなひかへす時を得て、 今やゝ代はる国のため。

【呉超】或不得享自由之樂。或長受此压制之嚴。或為國民而逢捕虜。或思獨立而極艱難。我敢任事。為祈神明。

【同是】漢訳なし

【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

10

Y cuando en noche oscura se envuelva el cementerio

また、暗い夜のとばりが墓地をつつみ、

Y solos sólo muertos queden velando alli,

ただ、死者だけがあたりを見守るようなときには、

No tus[r]bes su reposo, no turbes el misterio,

静けさを、乱さないでくれ、その神秘を、乱さないでくれ、

Tal vez acorde, oigas de citara ó salterio,

多分、調べが、琴の調べが聞こえるだろう、

Soy yo, querida Patria, yo que te canto á ti.

わたしだよ、愛する祖国よ、わたしが君に歌っているんだよ。

【宮本】凄然たる夜色墳墓を蔽ひ、死者独り醒め居るとき、乞ふ静謐を攪擾する勿れ。かくて鏘爾たる琴瑟の音するを聞かば、最愛の本国よ。是れ汝のため我が雅頌を唱ふるものと知れ。

【美妙】墓所おし包むよるの色、 すぎきが中にたゞひとり  
亡者は寐ねでさむるかな。 その静けさな騒がせそ。  
さて静まれる万象に やがては琴の音もせん。  
それいつくしのわが国の いはひの歌と聞け、それを。

【呉超】凄然夜色蔽墳墓。死者居而独醒。乞勿攪擾此静謐。若鏘爾聞琴瑟之音。知最愛之本国兮。為我歌雅頌。

【同是】漢訳なし



【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

11

Y cuando ya mi tumba se todos olvidada

いつかわたしの墓が忘れ去られ、

No tenga cruz ni piedra que masquen su lugar,

その跡を示す十字架や石が消え去れば、

Deja que la are el hombre, la esparza con la azada

ひとにその土を耕させ、鋤でならし、

Y mis cenizas antes que vuelvan á la naba,

また、わたしの遺骸は、消えないうちに、

El polvo de tu alfombra que vayan á formar.

その粉を敷きつめて、君の絨毯にしてくれ。

【宮本】我墓荒廢に委し十字架石碑の墓標なきに至るとも農夫の鋤犁を入るゝに任せよ。我遺骸は漸燼する前に本国の雑草を蔽ふ塵埃中に混入して田野の肥料とならん。

【美妙】より我墓は荒れはてゝ よし鋤鋤のかゝるとも、  
只その儘に為せよかし。 うつせみの身はいたづらに  
腐りはせじな、わが国の 草に交はり、塵に入り、

只わが国を肥やしてん。(注：次の12と合併)

【呉超】我墓委荒廢。任入農夫之鋤犁。至十字架石碑之墓標。我遺体漸燼。前蔽本国之雑草。混入塵埃中。而為田野之肥料。

【同是】漢訳なし

【君武】男兒誠愛國 死則已矣 又何為此囂囂 任我墓之荒廢兮 以我墓十字之石標兮 飽農夫之鋤犁 任我遺體之漸燼兮 混入本國之雑草兮 為田野之肥料 / 八解

【清馥】男兒誠愛國。死則已矣。[又]何為此囂囂任[我]墓之荒廢兮。以[我墓]十字碑為[之]石標兮 飽農夫[之]鋤犁之礪 任[我]遺體之漸燼兮埋荒[混入本國之雑草]兮而為田野之肥料 / 八解

【学生歌】【君武】と同じ

12

Entónces nada importa me pongas en olvido,

そうしてくれたら、忘れ去られてもかまわない。

En[Tu] atmósfera, tu espacio, tus valles cruzare;

わたしは君の大气、君の空間、君の谷間谷間にただよう、

Vibrante y limpia nota seré para tu oido,

わたしは、君の耳にひびきわたる清らかな調べ、

Aroma, luz, colores, rumor, canto, gemido

かおり、ひかり、いろ、そよめき、さえずり、うなり、こそ、

Constante repitiendo la esencia de mi fé.

わたしの胸中の鳴りやまぬ響き。

【宮本】汝が我を忘るゝと否とは我に於て頓着せず、我靈は常に汝の天地の間を翱翔しつゝあらん。我は汝の耳に取り劉曉なる楽譜となり、長へに我信する主義を繰返しつゝ同胞に鼓吹する所あらん。

【美妙】(注：前の11と合併)

そもそも国は国のため、

死にゆくわれを忘るゝか。

よし忘れてもいとほじを。

只わが靈は国を恋ふ。

迷ひて去らず、行きかへり、

おもひを変へて、くに民の

くり返し、又くりかへし、

矢竹ごゝるの一すぢを

忘るゝ事も有るべきか。

我はいとはず、忘るとも。

国の中有に立ちまよふ。

やがて楽しき天樂に

耳に入れてん、くりかへし、

死ぬまで張りし我むねの

くりかへし又くりかへし。

【呉超】本国其忘我否耶。我靈魂常翱翔於本土天地之間。

【同是】漢訳なし

【君武】漢訳なし

【清馥】漢訳なし

【学生歌】【君武】と同じく漢訳なし

13

Mi Patria idolatrada, dolor de mis dolores,

わたしが熱愛した祖国よ、わたしの悩みのなかの悩みよ、

Querida Filipinas, oye el postrer adios.

愛するフィリピンよ、聞け、最後の声を。

Ahi te dejo todo, mis padres, mis amores.

もはや、みなともお別れだ、ちちはは、いとしき人たちよ。

Voy s[d]ondo[e] no hay esclavos, verdugos ni opresores,

わたしは往くのだ、奴隷のいない、冷血漢のいない、圧制者のいないところへ、

Dónde la fé no mata, dónde el que reina es Dios.

まことが踏みにじられないところへ、神が治者であるところへ。

【宮本】最愛の本国よ、最愛の同胞よ。惨の又惨なる我臨終の辞を聞け。我は此土に我家族と満幅の愛情とを名残として逝かん。我は是れより奴隷もなく、劊夫もなく、逆主もなく、神の照臨まします真理の安宅たる彼土に旅立せん。

【美妙】さていつくしき我国よ、 さて懐かしきはらからよ、

むごき限りの臨終の わがくり言を聞けよかし。

さらば別れぞ、この土に 血筋のものといとをしき

思ひを残し、わらは行く、 さて行くさきは奴婢も無し、

獄卒もなし、暴君も、 汚吏も無し無し、神のみぞ

只おはします、「大道」の いと安らけきすみかなる

たのしあの世にいざ行かん。

【呉超】吁嗟乎。最愛之本国兮。最愛之同胞兮。惨莫惨於聞臨終之辞。我与本国有満幅之愛情而竟逝。想明神照臨。為真理之安宅。覓留此土。

【同是】漢訳なし

【君武】我最愛之本国 我最愛之同胞 哀矣怨矣 其一聽我臨終之辭 留滿幅之愛情於此土 我其逝矣 逆主乎  
劊夫乎 賊吏乎 奴隸乎 其將以此真理之安宅為窟穴矣 / 九解

【清馥】我最愛之本国。我最愛之同胞。哀矣怨矣。其一聽我臨終之辭。留滿幅之愛情於此土。我其逝矣。逆主乎。  
劊夫乎。賊吏乎。奴隸乎。其將以此真理為[之]安宅為窟穴矣 / 九解

【学生歌】【君武】と同じ

14

Adios padres y hermanos, trozos del alma mia,  
さようなら、ちちはは、兄弟たち、わたしの魂の形見たち、  
Amigos de la infancia en el perdido hogar,  
今はなきわが家で遊んだ幼友達、  
Dad gracias que descanso del fatigoso dia;  
感謝を捧げてくれ、わたしは苦しみの日目を離れて休息につくのだから。  
Adios, dulce estrangera, mi amiga, mi alegu[ri]á,  
さようなら、思い出深き外国の地よ、いとしいひとよ、わたしの喜びであったものよ、  
Adios, queridos se/res morir es descansar.  
さようなら、わが同胞よ、死は休息なのだよ。

José Rizal.

【宮本】慈親よ、兄弟よ、愛児よ、竹馬の諸友よ。いざさらば、我は困厄に処せる後今や楽土に就かん。いざさらば、我神魂は逝いて奇しき溫柔なる悦楽を享けん。いざさらば、同胞よ。死は休息なるぞかし。

【美妙】さらばぞさらば懐かしき 親よはらから子よ友よ  
くるしみを経て今はしも 我は楽土に出でぞ立つ。  
さらばぞ聞きね、魂は やさし、楽しき溫柔の  
さとの悦楽を受くるなり。 さらばよさらば、いざさらば、  
死は休息と思へかし。

【呉超】慈親乎。兄弟乎。愛児乎。同志之諸友乎。少閑。我處困厄後而就樂土矣。少閑。我神魂去而享悦樂矣。少閑。同胞乎。死者休息矣。

【同是】漢訳なし

【君武】諸友乎 慈親乎 兄弟乎 愛児乎 我何忍離汝 我何忍離此最可愛之國 我何忍離此最可哀憐之國 我生也勞 我死也樂 我人世之工已盡於此日兮 我同胞其勉盡未來之責任兮 我最愛之國方幼稚 我最愛之同胞方幼稚 前途之命運 尚未定兮 / 十解

【清馥】諸友乎。慈親乎。兄弟乎。愛児乎。我何忍離汝。我何忍離此最可愛之國。我何忍離此最可[哀]憐之國。我生也勞。我死也樂。我人世之[工]已盡於此日兮。我同胞其勉盡未來之。責任[兮]我最愛之國方幼稚。我最愛之同胞方幼稚 前途之命運。尚未定兮 / 十解

【学生歌】【君武】と同じ 之乙己[之工已] 今日[此日]

### 清末小説から

崔文東氏、蘇建新氏より資料をいただきました。感謝します  
王 琚子 『《繡像小説》研究』揚州大学碩士論文  
2003.5

陸 昕 《說部叢書》搜尋記 黃秀如主編 『書の迷  
恋』台湾・英属蓋曼群島商網路与書股份有限  
公司台湾分公司2004.4 網路与書10 / 北京・  
現代出版社2009.9

楊 惠 論1902-1911年間晚清小説期刊中的指図  
『海南大学学报人文社会科学版』2009年4月  
(第27卷第2期) 2009.4

劉 穎慧 挿図と晚清小説の伝播 以晚清《申報》  
小説廣告為例 『理論導刊』2006年第11期  
2006.11.10

劉 雲 《小額》及其作者松友梅 松友梅(松齡)  
著 劉一之標点・注釈 『小額(注釈本)』北  
京・世界図書出版公司北京公司2011.7

劉 霞 『《文明小史》研究』煙台・魯東大学碩士  
學位論文2012.4.20

熊 權 『《新青年》図伝』西安・陝西出版传媒集  
団、陝西人民出版社2013.6

劉 穎慧 晚清小説期刊的廣告敘述 以晚清報載  
《月月小説》廣告為中心探討 『東南大学学  
報(哲学社会科学版)』2013年11月(第15卷  
第6期) 2013.11 電字版

張 耀傑 『北大教授与《新青年》』北京・新星出版  
社2014.6

王 思睿 新文化運動的路径反思 張耀傑『北大教授  
与《新青年》』北京・新星出版社2014.6

張 治 新見晚清翻譯小説《奇言広記》 『南方都  
市報』2014.8.31 電字版  
商務印書館“說部叢書”里的原作 中西  
文学交流瑣談之四 『南方都市報』2017.8.20  
電字版  
再談商務印書館“說部叢書”里的原作  
中西文学交流瑣談之五 『南方都市報』  
2017.9.17 電字版

郭 長海 『劉半農前期研究』北京・團結出版社  
2014.9 中華南社文化書系 第3輯

劉 穎慧 晚清小説市場的盜版与版盜版現象探討  
以晚清《申報》、《時報》相關廣告為中心  
『長安學刊』第3卷第2期 2012.5

吳 佩珍 シェイクスピア翻案劇『オセロ』と植民地  
台湾 一九一〇年代『台湾日日新報』を中  
心に 松田幸子、笹山敬輔、姚紅編著 『異文  
化理解とパフォーマンス』春風者2016.7.15

古二德(CÉSAR GUARDE-PAZ) A CRITICAL REVIEW OF  
JAPANESE SCHOLARSHIP ON MODERN CHINESE  
FICTION AND TRANSLATION STUDIES (嶺南

大学) 『JOURNAL OF MODERN LITERATURE IN  
CHINESE 現代中文文学報』第14卷第1期 2017夏

歐陽 健 再提胡適的博士学位問題南開大学 『文学  
与文化』2017年第1期(總第29期) 2017.2.15

李 雲 《中国近代小説編年史》補遺:天津《直  
報》与小説相關資料(上) 南開大学 『文学  
与文化』2017年第1期(總第29期) 2017.2.15



『天演論・茶花女遺事』壹佰貳拾年紀念特藏  
北京・商務印書館2017.3

陳 思和 (『天演論・茶花女遺事』壹佰貳拾年紀念  
特藏) 序一

陳 建華 (『天演論・茶花女遺事』壹佰貳拾年紀念  
特藏) 序二

編者名不記 商務版林訳作品目録1903-1924

呂 順長 (『清末維新派人物致山本憲書札考釈』)  
解題 『清末維新派人物致山本憲書札考釈』  
上海交通大学出版社2017.6

張 振国 『民国文言小説史』南京・鳳凰出版社  
2017.6

楊劍主編 『張元濟圖書館藏清末民国商務版本重要  
文献簡介』杭州・西泠印社出版社2017.6

陳 碩文 訳者現身の跨国行旅:從《疤面瑪歌(MARGOT

- LA BAKAFRÉ) 到《毒蛇圈》 『政大中文学報』第27期 2017.6 電字版
- 柳 和城 『書裏書外 張元濟与現代中国出版』上海交通大学出版社2017.8
- 侯運華、劉焱 『中国近代小説流派研究』北京·中国社会科学出版社2017.8
- 《商務印書館120年大事記》編寫組編 『商務印書館120年大事記(1897-2017)』北京·商務印書館2017.8
- 邵 棟 『紙上銀幕：民初的影戲小説』台湾·秀威資訊科技股份有限公司2017.8
- 賈 立元 “晚清科幻小説”概念辨析 『中国現代文学研究叢刊』2017年第8期(總第217期) 2017. 8.15
- 董 牧杭 日本知名學者為何到中國亞馬遜來謾罵同行? ウェブサイト『澎湃新聞』2017.8.16 電字版
- 董麗敏等著 『商務印書館与中国文化的“現代”轉型(1902-1932)』北京·商務印書館2017.9
- 蔡靜、方維保 從傳播視角看林訥小説序跋的價值 『中国現代文学研究叢刊』2017年第9期(總第218期) 2017.9.15
- 楊 湯琛 晚清域外遊記現代性研究的羅輯基点 『中国現代文学研究叢刊』2017年第9期(總第218期) 2017.9.15
- 石 井剛 百年を跨いで照らしあう二つの「世紀末的輝き」(『抑圧されたモダニティ』) 『東方』第442号 2017.12.5
- 范伯群主編 『中国現代通俗文学与通俗文化互文研究』上下册  
南京·鳳凰出版传媒股份有限公司、江蘇鳳凰教育出版社2017.2
- 上册
- 1 通俗文学与蘇州評彈 .....童李君
  - 2 通俗文学与戲曲話劇 .....鮑開愷、艾立中
  - 3 通俗文学与電影芸術 .....李 斌
  - 4 通俗文学与報紙副刊 .....黃 誠
  - 5 通俗文学与既刊、画報 .....湯哲声、胡明宇
  - 6 通俗作家与早期翻訊 .....馮 玲
- 7 通俗文学的營銷策略 .....石 娟  
下册
  - 8 中国近現代轉型期国情与民風的流变.....范伯群
  - 9 注統小説宏觀研究 .....張蕾、范伯群
  - 10 中国現代幻想小説 .....馮 鵠
  - 11 通俗作家筆下的散文小品研究 .....馮 鵠
  - 12 通俗文学作家的時評雜感 .....黃 誠
  - 13 通俗作家文史札記研究 .....李国平
  - 14 通俗作家的新旧体詩歌 .....錢繼雲、張元卿
- 吳仁華主編『革新与守固 林紓國際學術研討會論文集』北京·商務印書館2017.5
- 前言 .....吳仁華
- 古文傳授的現代命運 教育史上的林紓.....陳平原
- 一場曾發生的文白論爭 林紓一則晚年佚文的發現与  
积読.....夏曉虹
- 文学革命時期“林紓敗北”問題新探 兼論共和話語  
与新文学合法性的建立 .....宋声泉
- 文化交流中“二三流者”的非凡意義 略說林訥小説  
中的通俗作品 .....陸建德
- 林訥言情小説《巴黎茶花女遺事》的日常性 .....黃錦珠
- 林紓《韓柳文研究法》的學術史意義 .....劉 城
- 林紓的楚辭讀本与楚辭批評 .....郭 丹
- 心頭未蓄風波險，一任蒲帆向那边 從《畏廬詩存》  
題画詩看林紓的生命情調 .....朱曉慧
- 詩世界里先維新 林紓《閩中新樂府》的詩歌史意義  
.....胡全章
- 身世原非杜拾遺，淒涼偏讀拾遺詩 試析杜甫对林紓  
詩歌創作的影響 .....徐 瑛
- 画壇又譜広陵散 《<林紓畫画集>序》 .....盧仁龍
- 略論林紓的繪画 .....林 農
- 西方文化的引薦者与国学傳統的衛道士 林紓晚年談  
中西方繪画 .....王少羽
- 林紓与近現代之交的閩都戲劇 .....鄒自振
- 林紓致陳宝琛三札考釈 .....宋一明
- 交友 結社 從師：琴南先生在榕生平軼事考辨簡  
評 .....蘇建新
- 嚴復、林紓交遊考論 .....郭道平
- 林紓与杜亞泉 .....王 勇
- 《林紓家書》和家教 .....包立民
- 林紓的文化品格与大学文化建設 .....吳仁華、郭丹